する總ての制限を輕侮し、其爲さんと欲する事業を斷じて直ちに其體と其心の全力を投げ掛けたり。彼の慾望は大なりき。されど彼は冷靜なる意思を以て之を遂行せり。彼曰く

予が鐵の手は予が腕の端に在るに非ず。直ちに我頭腦に連結するものなり。

彼の成功は此鐵也似たる意思の生じたる所なりき。

ナポレオン大帝論（一五）

我等は成功のナポレオンを語らんが爲に此文を草せり。墮落のナポレオン、失敗のナポレオンを語らんは我等の目的に非ず。カーライル、彼の失敗を論じて曰く

彼は事實の信仰を棄てゝ虚僞を信ずべく始めたり。墺國朝、法王朝及び古來の虚僞なるものと自己を結ばんとしたり。是れ彼が嘗て其虚僞なりしことを信じたるものなり。彼は佛國革命の目的は畢竟ナポレオン朝を建つるに在りとの虚僞なる假定を信ずるに至れり。

此言之を得たり。彼は世界を足下に蹂躙せんとして失敗せり。彼の頭等コンシュルたるや彼は其妹カロラインをマラーの妻として與ふることを拒みたり。彼は言ひき

マラーとや。彼は旅店の子息に非ずや。頭等コンシュルの位置に達したる予はマラーの家の如き賤しき血を以て我家の血に混ずる能はず。

と。人の貴賤を定むるものは家系に非ずして其人物の價値に在りとし、人間の平等を唱へたる彼の心は漸く無意義なる貴族主義の捉ふる

所となれり。彼は後日に至りて政略の爲にマラーの戀を遂げしめたりと雖も彼は既に此時に於て墮落し始めたり。斯くて彼は罪なきジョセフインを離別せり。帝王の位に上れり。而して彼の福運は覆へれり。ウオートルローの戰爭は彼の四十六歳の時なりき。彼は自ら此戰爭を語りて曰へり。

佛軍は戰勝の時よりも此敗軍に於て最も其光華を發したり。我軍隊は擊破せられたるに非ず。非常なる兵數の懸隅に依りて壓倒せられ、虐殺せられ、犧牲にせられたるものなり。

彼は自ら其敗北を以て戰の罪に非ずとせり。されど公平なる史家は曰ひぬ。

彼の年齡と其肥滿とは彼を非運ならしめたり。七月十七日の朝、彼はリグニイの戰を終へて寢床に横はれり。彼にして若し懶惰の態度に出でず、直ちに活動を始めたらんにはブルッセルの援軍至らざる前に於てウエリントンを擊破し得たりしなるべし。

嗚呼老いたるナポレオンは遂に若きナポレオンに如かざりき。

カーライル論（一）

近頃カーライルの「英雄論」を所謂現代語に飜譯して世に問ひたる者あり。名高きクロウエル傳の譯本も亦世に出でたりと聞く。此書の著者或時、茨城縣の或る村落に遊びしに一青年のカーライル集を讀みたりと云へるに逢へり。彼曰くカーライル集は舊きものなり。されど余輩の年少なるも、今日之を讀んで猶ほ新味を感ずと。嗚呼果して然る乎。現代の日本青年たる彼が古きカーライルを第二十世紀に入りたる今日に讀みて猶ほ新味を感ずると云ふは恐らくは正直な

る告白ならん。何となれば總ての天才の作物は如何なる場合に於ても全く朽廢し終らざればなり。此意義に於てシエーキスピーアは今日に於ても猶ほ新しきものなり。此意義に於てゲーテのハウストも亦新しきものなり。此意義に於て李、杜、韓、白も亦新しき詩人なり。天才の着たる衣粧、卽ち其言語、其思想發表の樣式は勿論時世粧なり。故に時勢一たび去れば古きものとなるなり。されど天才自身、則ち天才の心は永遠に靈活なるものなり。彼等は此意義に於て今日と雖も新しきものなり。恐らくは今日以後に於ても恒に、長へに新しきものならん。我等もカーライルを讀む毎に我心の刺擊せられ、鼓舞せらるゝことを感ず。請ふ我等をして我心に映じたる蘇國の文豪、第十九世紀の生みたる大思想家トーマス、カーライル先生を畫かしめよ。

カーライル論（二）

社會主義の一論客カーライルを論じて謂へらく、彼は電光石火の間に事物の深理を見る、彼の事物を理會するは理論の結果に非ず、彼は忍耐深き精細なる分解をなし、而して後に總合的に眞理に達したるに非ず、彼は統一もなく結合もなき直覺に依りて眞理に達したるものなりと。我等はカーライルに對する此批判には多大の眞理ありと信ず。されど此批判を爲したる社會主義の一論客が是に依りてカーライルの思想界に於ける價値を低くせんとしたるは恐らくは天才に對する公平なる態度ならざらん。何となれば人は論理學よりも大なるものにして、天才の心に宿りたる生命は必しも乾燥なる哲學的の分解に依りて其靈活の力を失ふべきものに非ればなり。試に思へ、花は自から開き、

水は自から流るゝに非ずや。天何をか言はんや、四時行はれ百物生ず宇宙は其有るが如くに有り、到底哲學者の小さき論理學に依りて包轄し得べきものに非るなり。されど宇宙は論理學に超越するが故に宇宙は無意義のものなる乎。天下寧ろ此理あらんや。天才は小さき宇宙なり。宇宙の少さき權化なり。我等が天才の作物に遊ぶは猶ほ我等が山水に遊ぶが如し。我等は此處に芳香を嗅ぐを得ば足れり。我等は此所に樂しき空氣に包まるゝを得ば可なり。我等は此所に花を見鳥を聽くを得ば可なり。總じて之を言へば、我等は此所に樂み、此所に思ひ、此に考へ、此に奬まさるゝを得れば則ち可なり。我等は必しも學校の教室に於て教師の講義を聞くが如く論理の一貫を此所に要求するの權なきなり。

カーライル論（三）

實にカーライルの思想は論理に超絶す。彼は一個の系統を立てたる哲學者に非ず。彼は其議論の前提と、結論とに於て正しく一致し得る總合的、組織的の思想を有したるものに非ず。彼は唯だ見るまゝを語り、思ふ儘を說きし正直なる天才なりしのみ。昨日の風は東より吹き、今日の風は西より吹く。昨日は曇り、今日は晴る。彼は自ら自己の自語相違を懸念せず。彼は自ら自己の自家撞着を意とせず。彼は唯だ有るまゝに有りしのみ。此の如き天才の作物に向て其思想の徑路に一定の方向を發見せんとするは恐らくは徒勞の業ならん。されど山に上るものは山の全形を畫く能はざるものも、猶ほ善く山中の趣を說くことを得べし。請ふ我等をして唯だ我等の讀み得たるカーライル

の面影を語らしめよ。

カーライル集を讀みて最も強く我等の心を動かすものは他なし、彼の心に絶えず往來したる宗教問題則ち是なり。我等は此點に於てカーライル集と東洋文藝の差異を最も著しく感ず。東洋文藝と雖も勿論常に宗教問題と接觸を保たざるに非ず。源氏物語に於ても、平家物語、太平記に於ても我等は時代の宗教思想が常に作者を動かしつゝあることを感ず。されど概して言へば彼等の宗教思想は一定の形式に固着し、一定の安心立命に立つ。彼等の宗教は既に宇宙の疑問を解釋し盡したる光明の宗教にして、彼等の安心は小さき哲學の安心なり。されどカーライル集の宗教に至ては之に異れり。彼に在りては宇宙は無限なる暗黑にして、人の思想と稱するものは此間に於て瞬間の閃光を發し直ちに暗黑に還沒する極めて玄微なる存在のみ。存在の價値なき存在のみ。彼に在りては永遠は悲慘なる深淵にして生命の熱と狂想とは電光石火の裏に此深淵に吸收せらる。人間は此深淵の岸に立ちて、蜉蝣の短き生命に執著し、必室の運命として遂に此深淵に沒するものゝみ。此の如く恐怖すべき宇宙の威力は常に彼の頭を壓せり。常に彼をして人間の有限なることゝ宇宙の無限なることを念はしめたり。斯くして彼の心は常に覺め、常に驚かざることを得ざりき。東洋の文學は安心の宗教を鼓吹し、カーライル集は恐怖の宗教を鼓吹す。東洋の文學は一定の信條に立籠りて宇宙の現實に對することを避け、カーライル集は直ちに恐怖すべく、覺醒すべく、深思すべき宇宙の現實に對す。カーライル嘗て寺院を有するものゝ幸福を論じて謂へらく、『寺院を有するものは強し。彼は無限大の宇宙の中央に於て、無限長の時間の會流點に於て、神及び人に對して人らしく立つを得るものなり。

宇宙は空しき崖畔なき無限大なり。されど寺院を有するものゝ爲には此宇宙は堅固なる都城となる』と。東洋の文學は寺院を有し、信條を有したるが故に無限大の宇宙も彼等に取りては其哲學の顯現に過ぎざりき。三世に關する彼等の教理は永遠に流轉すべき靈に向つて供せられたる案内書なりき。されどカーライルは寺院を有せず、教會を有せず、信條を有せず、直ちにその面を以て無限大なる宇宙に對したり。彼は彼を呑まんとする底なき深淵の岸頭に立ちたり。彼何ぞ恐怖せざることを得んや。彼何ぞ強く感じ、深く思はざることを得んや。彼の此煩悶は恰も宗教の祖師の煩悶に同じかりき。彼は青年なる釋迦が其王宮に於て煩悶したるが如く煩悶したり。其の煩悶の結果、彼は時として一種の失望哲學に陷らざることを得ざりき。死生の問題は彼の心に深く食込みたり。人生の須臾にして宇宙の永遠より永遠に續くべきことを痛感せざる能はざりし彼は死生の何ものたるを解釋して其心の病を癒さんと欲したり。されど彼は容易に光明に達することを能はざりき。彼は問題を解釋せんと欲して先づ問題の益す紛糾するを見たり。彼は光明に達せんとして先づ暗黑を捉へたり。斯くて彼は一たび突入せんとしたる問題を避けて、寧ろ無頓着を以て之を待たんと欲したり。彼謂へらく

疲れたる人間は遂に安息を求む。死は人の爲に安息を齎らすものなり。我等若し疲勞の極に達すれば我等は死に依りても安息を得んと欲す。死生の問題は人生に疲れざるものに在りては緊要の問題なり。されど極疲、極勞に達したるものは唯だ安息を求むるのみ。所謂死生の問題に對しては結局無頓着ならざるを得ず。此所に至れば我等は無頓着の中心に横臥す。斯くて死生に關する恐るべき

夢は彼方に轉じ去る。（サルトル、レサルタス）

是れ豈一種の『バイロニズム』に非ずや。是れ豈一種の自殺哲學に非ずや。是れ豈所謂『諦らめられぬと諦らめた』と云ふの類に非ずや。『人生は勞役なり。勞役の極度に達するものは安息を求む。安息を求むること甚しきものは死をだも避けず。斯くて死生に無頓着となるを得と』は是豈に最も悲しき失望の聲に非ずや。是れ豈最も慘澹たる安心法に非ずや。されどカーライルの心には常に此の如き陰翳ありき。彼が終生此の如き心の陰翳より全く超絶するを得たるや否やは疑問なり。以太利の政治家にして思想家たりしマジニーは嘗てカーライルの四　革命史を評して曰く

彼は其史上に寫したる英雄の爲さんとする所のもの、其の天職とする所のもの、其目的とする所のものを語らず。たゞ彼等が時の呑む所となりて、名狀し難き底なき深淵（則ち永遠）に落ち行くことを記したり。彼の史は宿命論を具體的にしたるもののみ。

林林總々たる世上の人、終に盡く永遠の深淵に沒するのみ。人間は小さき舟なり。宇宙は無限の海なり。小我は瞬息の間に滅び、我等は唯だ恐怖すべき時の海に還沒す。覺醒したるカーライルの心は此の大なる宇宙の威力の前に戰きたり。是れ彼の煩悶の結果なり。否煩悶の中心なり。彼の若き友ミッチエルが彼の此の如きを見て彼は偏執なるヒユーム派の懷疑論者となれりと云ひ、巧みに詭辯を弄するものなりと云ひ、不信仰を愛する盲目なる偏見を有するものとなれりと云ひたるは當時の彼に在りては、正しく半面の眞理ありと謂つべし。

されどカーライルは遂に此の如き失望の哲學者にして已まざりき。彼は佛敎の祖師たる釋迦の如く無限の空虛を考へ、最後の生の全滅を期待し、其の心を死灰の如くし、單調なる安靜に依りて靜かに生を送り、死を迎ふる能はざりき。かゝる枯木、寒巖に倚る底の虛無寂滅の信仰は彼の焚ゆるが如き心に生ずべきものには非りき。彼は好んで獨逸の文學を涉獵し、フイヒテの哲學に會心する所ありしかば、是に依りて遂に一種の信仰に達することを得たり。フイヒテは宇宙を以て神聖なる理(アイデヤ)の顯現なりとしたるものなり。フイヒテの信ずる所に依れば此の理(アイデヤ)のみ實在(リアリティ)にして、宇宙は此の實在(リアリティ)の自己を顯はす表彰なり。他の語を以て之を言へば人間の經驗が達し得る世界は神聖なる理(アイデア)則ち實在(リアリティ)の衣粧なり。此の實在は有心なり。此の實在は生命なり。此の實在は意匠と目的を有す。是れ彼の信仰なり。フイヒテは此點に於て正しき凡神論者なり。彼の思想は東洋の老莊思想若くは宋儒の理氣天人の學と多くの點に於て其範疇を同じくす。カーライルは此處に其煩悶を癒すべき力を得たり。彼曰へらく

物質(マツター)は靈(スピリツト)なり。靈の顯現なり。見るべきもの(則ち物質)は見るべからざるもの(卽ち靈)の衣粧なり。

○

總ての見るべきものは記號(エンブレム)なり。卿の見る所の物は其物自らの爲に存するには非す、物質は唯だ靈(スピリチユアル)なるものゝ爲に存し、或る理(アイデア)を代表して之に形體を與ふるものなり。

○

宇宙は神の表彰(シンボル)なり。人も亦神の表彰なり。表彰とは無限が有限の形にて現はれたるものなり。若くは有限の形に依りて無限を顯

示するものなり。無限が自己に達し得べからしむる爲に自ら有限に結びたるものなり。

○

尋常の生活は不思議を以て帶とし、不思議を以て基礎とす。卿のその毛氈も、股引も、奇蹟なり。壯嚴と不思議と恐怖すべきことに滿ち言語の形容を超絶したる神意は各々の人、及び各の物の中に在り。是れ新しき思想にして、又舊るき思想なり。彼は近世及び現代の思潮にして而も印度、及び支那思想の復活に過ぎざる凡神論に於て心の船の動搖を免るゝことを得たり。彼は宇宙及び人間を永遠にして絶待たる一理（アイデヤ）の顯現なりと看取し得たるが故に、此に始めて死生の問題を解くべき鍵を捉みたり。此の信仰に依れば人間の生命の根は永遠に在り、我等は生れて而して死すものなりと見ゆ、されど是れしか見ゆるのみ、其實は我等は恒に存じ、長へに存するものなり、何となれば我等は神の表彰（シンボル）にして、我等の實在は則ち神なればなり。『幽靈の正體見たり枯尾花』、詮じ來ればカーライルの大なる煩悶が齎らし來りたる覺醒も遂に梵學、老莊學の範疇を脱する能はずとせば、我等はマコレー卿が人間は宗教の問題に於ては常に一所を回轉するのみなりと道破したることの頗る眞理に近きを思はざるを得ず。

カーライル論（五）

然りと雖もカーライルはフイヒテに非ず。彼は到底哲學者に非ずして詩人なり。彼は考ふる人に非ずして見る人なり。彼の心は宇宙の現實に對して常に驚き、常に恐れ、常に讃美したり。彼は時として人の心の内に神ありと觀じ、人は神の聲を聞き、神を見ることを得べしと謂

へり。

神の聲は人の直覺に聞ゆ。我（エゴー）を人間的外力より離し、本來の純粹に於て上よりのインスピレーションの胸に獻ぐるは神の爲に神殿を造る所以なり。

○

神の氣息は人の中に在り。人の體は神殿なり。人の不死の靈は祭司なり。神に犧牲を獻じ總ての人の爲に神に仕ふるものは則ち是なり。

○

神は星の天に在り。廣き海に在り。偉人の靜かにして貴き性格に在り。就中天才の言語に在り。總ての自尊的劣情より潔められたる卿の心の奥に在り。神は何處にも在り。神を見ることを學べ。

卿は神の奇蹟に依て圍まる。卿は無限の中を泳ぐ。信ぜよ。卿は更に善き人となるべし。卿は人らしき人となるべし。

彼は數ば此の如き思想を漏らしたり。凡神論の結果は唯心論なり。宇宙は則ち神の顯現なりと觀ずる前提より來るべき結論は則ち我心の中に神ありと云ふに歸す。彼は此の如くにして總ての凡神論者が達する所に達し、我が直覺の中に神ありと感じたり。此所までの彼は哲學者なり。されど彼は哲學者に非ずして詩人なりしが故に、無限の宇宙と幽微なる人間とを對照し、宇宙を衣粧としたる實在の遂に人間の理會し得べきものに非ることに思ひ至り、再び其心を懷疑の陰翳に包まれざるを得ざりき。彼謂へらく、

空しき顯現の底に在るものは何ぞや。自然を以て斷へず變化しつつある活きたる上衣とする不動不變の本體は何ぞや。何人も之を

知らず。我等は宇宙は美しく、恐るべきものなりと信ず。されど其本體は言語の形容し難きものとして殘る。我等は此覆面したる顏の前に、我等の膝を屈すべきのみ。驚歎と崇拜とは我等の眞の態度なり。

○

自然は書卷なり。其作者にして記者たるものは神なり。豫言者と雖も僅に其一句半句を讀み得るのみ。

彼は一面に於ては直覺の中に神は在りと云へり。是れ所謂狗子にも亦佛性あるものなり。是れ所謂人の性は則ち天の命なるものなり。されど彼は他の一面に於て宇宙は人間に取りては到底解釋すべからざる無限大の謎なることを感じたり。彼の宇宙は彼が其凡神論に於て一種の覺醒に達したる後と雖も依然として恐怖すべきものなり、依然として理會し難きものなり、依然として不思議なるものなり、依然として覆面したるものなり、依然として無限の威力を有するものなり。彼は唯だ膝を其前に屈して戰慄したるのみ。マジニー之を論じて曰く

カーライルの宗教は正義と力の源泉として神を求むるものに非ず。寧ろ避難所として神を求むるものなり。『我神よ、我を保護せよ。我舟は小なり。汝の海は大なり』とは恐くは彼の中心の叫ならん。此言之を得たり。彼の宇宙に對する驚歎と崇拜は恐怖の變形なり。宇宙の大なる威嚴に擊たれたるものゝ其前に拜跪して只管に其保護を請はんとする心なり。されど不思議にも彼は此の如き恐怖の心より活動の教義を生み出だせり。請ふ彼をして自ら其活動主義の起り來りたる心理的情態を說かしめよ。彼曰く

無限の名は善なり。則ち神なり。此所に地上に在る我等は恰も外國に戰ふ兵士の如し。我等は此戰爭に於ける全體の作戰計畫を知らず。我等は之を理會せざるべからざる必要も無し。我等は唯だ我等の手が爲すべきことを知る。我等をして兵士の如く、從順の心を以て、勇氣を以て、英雄豪傑的の歡喜を以て之を爲さしめよ。卿の手が爲すべく發見せし所のものを全力を以て之を爲せ。我等の背後に我等の各人の背後に人類の努力と、人類の勝利の六千年ありて横はる。我等の前には無限の時(タイム)あり。其處には未だ開闢せられざる、未だ征服せられざる大陸、及びエルドロドロス(猶ほ寶の山と云はんが如し)あり。是れ我等の開闢し、征服すべき所なり。而して我等を案内する彼の星は永遠の胸より我等の爲に光を放ち來らん。(「キャラクテリスチック」)

無限の神は、何ぞ有限の人の解し得る所ならんや。宇宙の運行は大なる神の作戰計畫なるが故に玄微なる人間が其意義を解し得ざるは勿論なり。されど我等は神の一兵士なり。我等の一兵士として爲すべきことは我心に印記せらる。我心は我に我が爲すべきことを敎ふ。我等は唯だ我が義務を爲すべきのみ。我等は唯だ猶豫することなくして進むべきのみ。我等は一の義務を爲したることに依りて、更に他の義務に達す。斯くて一歩、一歩に進み行きて、勇ましく最後の底なき深淵(死)に飛躍すべきのみ。彼の活動主義は實に此の如し。斯くして彼は言ひぬ。『總ての眞の勤勞は宗敎なり』と。我等は之を讀む毎に悲愴の感に擊たれざるを得ず。何となれば彼の宇宙は解すべからざるが如くにして又解すべきが如く、彼の人生は無意義の妄動なるが如くにして又合理の進行なるが如く、信仰の裏に懷疑あり、懷疑の裏に信仰

あり、恰も斷雲、時々月を掩ひて或は暗く、或は明るきが如きものあれば
なり。

カーライル論（六）

之を要するに我等はカーライル集を讀む毎に常に宗敎の講壇を仰ぎて尊き敎師の說敎を聞くが如く感ず。昔しは歐洲の中世紀に於ける藝術家は天に對する敬畏の心を其の藝術を實現すべき石材に刻みたり。フランダース。ヴェニス。フロレンスの藝術家は超自然的世界を我等に紹介したり。彼等は此世に棲みながら、無限に此世と隔たりたる他界を想ひたり。獨り中世のみならず總ての藝術家は此意義に於て人をして宗敎に觸れしむるものなり。ゲーテは嘗て人の死後を稱して「絕大なる夜」と云ひき。一語を以て無限の響を讀者の心に傳ふるものと謂つべし。故に總ての文學は或意味より云へば宗敎の講演なり。されどカーライル集の宗敎的臭味に至ては他の文學に比すれば最も濃厚なりと言はざるべからず。テインの英國文學史に曰く英人は到る處に說敎者を有し、その小說の中にすら說敎を有す、カーライルは則ち其英人氣質の最も顯著なるものなりと。此言蓋し之を得たり。斯くて東洋人たる我等はカーライル集を讀む毎に、我等の安靜の破られたるを感じ、我等の心の激動を感じ、我等の祖先を煩悶せしめたる安心立命の大問題が再び我等に還り來たりたるを感ず。第二十世紀の日本青年もカーライルを讀みて新しきを感ぜざる能はざるは蓋し此に在り。實にカーライルの生長したる英國は思想界の波動極めて激甚なりし時なりき。彼は十四歲にして牧師たるべき敎育を受けん爲にエヂンバラ大學に入りたりき。されど彼は其所に在りてヒ

ユームの無神論に動かされたり。彼は有神論に反抗する時代の思想に觸れたり。而して彼は遂に牧師たるべき希望を棄てたり。彼は大學を去りたる後、學校教師となりたり。時代の思潮は益す彼を煩悶せしめたり。彼は獨逸の文學に特殊の興味を催してフイヒテの哲學に其心の碇を得たり。彼はゲーテの「ハウスト」を耽讀して其思想を樂みたり。彼は其父母の信仰たる英國を支配する宗教(卽ち耶蘇新教)を棄てたり。勿論彼は其著作に於て公然、教會の信條を攻擊することを敢てせざりき。されど彼は其私生涯に於ては之を嘲罵せり。其著作の中にすら間接には之を攻擊せり。誤解すること勿れ。彼の心は宗教を好まざりしが故に宗教を攻擊したるものなりと。決して然らず。彼の心は最も宗教的なりしが故に、彼は父母の宗教、傳說の宗教、習慣の宗教、無意義の宗教を擲ち棄てざるを得ざりしのみ。斯くて彼は耶蘇教徒の信ずる人格的の神を棄てたり。彼は歷史上の總ての宗教を覆面したる實在が自己を顯はさんとする或る表彰に過ぎざるものなりと見たり。彼の信仰より云へば總ての宗教の偶像教なるが如く耶蘇教も亦偶像教なり。何となれば是れ皆直ちに實在を拜むものに非ずして表彰を拜むものなればなりと。彼れ謂へらく。

偶像は則ち「エイドロン」の義なり。「エイドロン」とは則ち見るべきものなり、則ち表彰なり、神自身に非ずして神の表彰なり。人は總て見るべきものを代表として見るべからざるものを拜む。人は總て此意義に於て偶像崇拜者なり。最も熱心なる淸教徒と雖も其所謂「信仰の告白」なるものを有す。是れ彼の偶像なり、總ての信條、文學、宗教的形式及び宗教思想は偶像なり、則ち見るべきものなり。彼は嘗て耶蘇教を以て一個の神話にして悲哀を拜むものなりと云ひ

たりき。彼に在りては耶蘇教も亦一個の偶像教なり。何となれば見るべからざる實在に見るべき形を與ふるものなればなり。されど彼は之と共に偶像教なるの故を以て偶像教を惡むものには非りき。何となれば彼は人は表彰を通ずるより外は實在に達し得べからざるが故に人は皆偶像を拜むものなりと信じたればなり。故に彼又謂へらく、

偶像崇拜の惡むべきは其敬畏の情の冷却したる時に在り。無意義に反復せらるゝ儀式に在り。機械的に繰代へさるゝ祈禱に在り。此見地より論ずれば第十二世紀に於て聖エドモンドの遺骨の前に跪拜したる深き崇敬の心は今日の耶蘇教の有する習慣的の信心、及び冷かなる哲學的宗教に勝れり。

總ての宗教を表彰なりとしたる彼は耶蘇教をも同じ種類の表彰として待ち其熱心の冷へざる間のみ之を尊敬せしと欲したり。我等は此處に彼の表彰論に對して悉しき批判をなさんとするものに非ず。何となればしかすることは此書が我等に與ふるよりも更に長き頁を此問題に用ひざるを得ざればなり。我等は唯だ彼の信ずる儘に其論旨の要點を記したるのみ。請ふ我等をして話頭を宗教問題より轉じて人間自身に關する彼の信仰に就て語らしめよ。

カーライル論（七）

人は上天を仰ぎて下地を履むが如く、一面に於ては宇宙を考へ、永遠を思ふと共に、他の一面に於ては自己を考へ、自己の屬する社會を考ふ。人は宇宙と人とを連ねて考ふる時は宗教家なり。人は人自身を考ふる時は「ヒューマニスト」なり。我等は既に宗教家たるカーライルの面

影を見たり。我等は更に進んで「ヒューマニスト」たるカーライルを研究せざるべからず。而して此研究の第一歩に於て我等の心に映ずる最も著しき特殊なる點は他なし。彼が宗教の問題と人間の問題とを全く分つべからざる一塊として見たること則ち是なり。彼の信ずる所に從へば人生を動かし、人生を善くし、人生を現在よりも高き壇上に進むる力は人間の中より出でずして上天より來らざるべからず。彼は是故に所有言語を以て彼の時代の無神無靈を罵詈したり。彼謂へらく、

最大幸福說(ベンザムの教理)ありとも、議會てふ政治的便宜ありとも、天文學者の測時器ありとも、神なき世はジョンソンの所謂魂の去りたる人のみ。無神は惡疾なり。王を殺したりとも、議院改革案を通過せしめたりとも、マンチエスターの一揆ありとも、此惡疾より生ずる結果を防ぐこと能はず。

○

スチユアルト朝の歸國以來、我等は「ユニタリアン」となり、懷疑論者となり、唯だ觀察、統計及び具體的眞理をのみ信じて道德的信念を有せざるものとなれり。我等は我等の活動の源泉を失へり。我等は生命の基礎として義務を有せざるに至れり。我等は今や威嚴ある神殿として生命を見ず、唯だ確實なる利益を得る機關として若くは典雅なる娛樂を受くべき堂として之を見るに至れり。

○

我等は眞の意義に於て治めらるゝことなきものとなれり。我等の政府は唯だ平和を維持し、租稅を集むることの外は何の慾望を有せざるものとなれり。我等の憲法は、眞なるもの、善きものを發見せん

には我等は唯だ二百萬の薄弱なる投票を造るに在るのみてふ原則を立てたり。我等の議會なるものは言語の製造所のみ。種々なる策士は此に在りて各音響を發すべく叫喚す。

之を要するにロック。ボーリングブローク。ポープの哲學に依り、スミス。ペンザムの經濟論、政治論に依り、一個人の自ら利せんとする心及び此心の集合按排を以て思想と實際の總ての問題を解釋し、物質的の滿足のみが人間の達し得べき幸福なりとする唯物的なる當時の世界思潮に對して彼は正面より反抗の聲を揚げたるものなり。彼の信ずる所に依れば當時の思潮は要するに此世界を以て大なる富の工場とせんとするに在るのみ。たとひ其取らんとする手段は或は集中的なるにせよ、或は放散的なるにせよ、人をして物質的滿足を增加する爲に努力せしむるを以て目的とするは當時の思潮の一致したる傾向なり。所謂實利主義も其中核は則ち是なり。オーエン、若しくはフーリエルの所謂社會主義も其中核は則ち是なり。所謂民政主義も其中核は則ち是なり。斯くて滔々として進み來れる時代思潮は富の增加、物質の進歩を謳歌して獨り凱歌を揚げんとす。されど是れ彼の堪へざる所なり。彼は斯の如くにして物質の日に大にして人間の日に小なるを見たり。彼は文明の利器と稱する器械、車輪、蒸氣機關の絕へざる響の中に人民の幽かなる歎息の聲を聞きたり。曰く我等の靈は山の如く重き物質の爲めに獄に投ぜられたる囚人の如くなれり。昔は我等は物質を以て我道具として、之を使役したり、今や物質は倒まに我等を以て其道具とし、我等を使役せり。曰く社會は我等を壓し、生產の爲の名に依りて我等を無靈無覺の獸の如く驅使せり、我等は昔の牛馬を使役したるが如く、物質の爲に使役せらる、我等は再び獨立自尊の人間に還ら

ざるべからずと。彼は文明の底に潛める深き悲哀を知れり。而して此の如き深くして大なる悲哀の源因は實に人類が自ら其生命の基礎たる神を棄てたるに在りとせり。彼の信ずる所に依れば神は人の心に「人であれ」(be men)とさゝやくものなり。人は此世界は神殿なりと覺らざるべからず。人は此神殿に於て艱難と辛勞とに依りて聖とせられ、有限の中に無限を學び、其眼を天に向けざるべからず。人生は天の日光を宿する露滴なり。人の人たるは此理を覺りて努力するに在り。彼謂へらく。

社會制度の重もなる目的は生産者(則ち人)にして生産(則ち物質)に非ず。心なき體は屍體なり。生産者(則ち人)を破壞する生産は社會を屍體たらしむるものなり。故に人類共働の目的は人の靈なり。落つれば同じ谷川の水。詮じ來れば社會の目的は人の靈を活かすに在り。人をして人らしからしむるに在り。他の語を以て之を言へば有限の身、朽つべき身を以て生れたる人をして無限に結び、絶待に合し、活潑々地の靈を以て活動せしむるに在り。而して彼はその時代思潮を以て正に此主義に逆行するものなりとしたる故に之に向て强き反抗の聲を揚げざる能はざりき。

カーライル論（八）

物質の奴隷たらんとする人類をして再び物質の主人たる位置を恢復せしむるの道、果して如何。カーライルは此點に於て彼の特殊なる個人主義に執着せり。彼は如何なる場合に於ても群衆より何の善きものゝ出づべしと信ずること能はざりき。彼は此故に所謂人望を求むる政治家を極端に罵詈したり。彼は此種の人を以て夏日の炎天にテ

ームス河中に溺死し、潮、汐に從て或は上り、或は下りて流るゝ狗の屍に比せり。彼曰く。

卿も亦此種の狗あるを認むるを得べし。其臭氣は我等の鼻を衝く。卿は日々之を見ることを得ん。其臭氣は次第に堪ゆべからざるに至らん。

彼は人望を以て雲煙の如きものとしたり。彼は民政の信者に非ず。彼は人民の力を認めず。人民の集合體たる人間の力を認めず。中心なく指道者なき集合的生活の意義を解せず。此の如きものは彼に取りては何ものにも非りき。此點に於ては彼は民政主義の論客と恰も兩極の隔絶したるが如く隔絶したる意見を有したり。民政主義の論者は世界の運命は一人若くは數人の手に依て變じ得べきものに非ずと信じ、一個人は如何なる場合に於ても人類全體の爲の大なる仕事場に働くべき一個の職人に過ぎずと信じ、人類全體は意識ある大なる生活體にして一個人は唯其の機械たるに過ぎずと信ず。されど彼の信仰は全く之に殊なれり。彼は社會は英雄に依りて治めらるべきものにして人類全體の爲すべき途は唯だ之に服從するに在りとせり。所謂英雄崇拜論とは則ち是なり。彼謂へらく、

自己よりも高きものを尊敬するは人間の胸に存する最も尊き感情なり。宗教も此感情の上に立つ。總ての社會に取りて生命の氣息たる忠義は則ち此感情なり。眞の偉大なるものに伏從的歎美を呈すること、則ち英雄崇拜の上に社會は立つ。(英雄崇拜論)

自由、平等の聲高く說かれたる世に於て、人々各其好める政治家を選擇し得べき權利を有する民政主義の世に於て、彼は忠義を說き、從順を教へ、社會は唯だ自己よりも高きものを尊敬する心の上にのみ榮ふと教

ふ。何ぞ其言の奇矯なるや。何ぞ其言の逆流的、反抗的なるや。時人が彼の言論に對して奇怪の思をなすを禁じ得ざりしもの亦宜なりと謂ふべし。されど此種の議論に對しては我等は特に公平にして冷靜なる態度を以て之を批判せざるべからず。我等の信ずる所に依れば所謂民政主義の人類に與ふる效果は必しも其信者の說く所の如くならざるに似たり。獨り是のみならざるなり。史學の示す所に依れば所謂自由平等を標榜する民政主義と雖も事實に於ては一個人若くは數人の嚮導者に案內せらるゝ貴族主義の變形たるもの少からず。眞の意義に於ける民政主義は殆ど地上に存在せざるものなるに似たり。されど我等は此處に民政主義と英雄崇拜論の優劣を論ぜんとするに非ず。我等は唯だ民政主義の論者と雖も暫らく其心を平かにして其正面の反對論を傾聽するの雅量あれかしと希望するのみ。請ふ我等をしてカーライルに還らしめよ。

カーライル論（八）

カーライルは我等に向ひ、頭を擧げて我等よりも高きものを見、其聲に聽き、其案內に從ふべきことを要求せり。請ひ問ふ。彼は何を以て平等の人間に對して此の如き要求を爲すの權ありや。他なし。彼の信ずる所を東洋的に意譯すれば英雄は天の此世に遣はされたるものにして天の使命を人間に齎すものなればなり。彼謂へらく

英雄は開闢の世に創造せられたる人の如し。彼は他の何物をも借らずして我等に來りたるものなり。我等に或報知を齎らし來らんが爲めに無限の、不思議なる國より遣はされたる使者なり。萬物の中核たる事實より直ちに來りしものなり。彼は此事實と共に棲み、

日々此事實と親みつゝ生活す。彼は世界の心臟より來る。彼は自ら物の源始的實在の一部なり。

○

英雄は物の內部に生活するものなり。眞の、神聖の、永遠のものは、常に一時的のもの、些細のものとして現はる。多數の人の見る所は後のものにして、英雄の見る所は前のものなり。英雄は、眞の、神聖の、永遠のものの中心に生活す。彼の生活は自然其物の一片なり。

○

如何なる時、如何なる場所、如何なる位置に於ても、英雄の特質は實在に還ることなり。彼が物の上に立つことなり。物の影の上に立たざることなり。

○

英雄は或る知られざる、若くは注意せられざる事實を發見して之を唱ふ。人は彼に聽き、彼に從ふ。而して是れ歷史の全體なり。英雄は此事實を發見して之を唱ふるのみならず、之を信じ、之を見る。彼は單に事實らしきもの、若くは他人より受取りたる風說、若くは推測として之を信ぜず、彼は躬自ら之を見る。絕待にして、何人の抑制をも許さゞる信仰を以て面を以て面に對して之を見る。彼は說を棄てて信念に從ひ、傳說を棄てゝ直覺に從ふ。

彼の所謂實在、彼の所謂事實、彼の所謂萬物の中核なるものは、其意義稍や明瞭を缺くと雖も之を要するに一個人が其心の全體を以て是れ眞理なりと信じ得るもののみ。彼の批評家は言へり。彼が英雄は萬物の中核より來りたるものなりと云ふは彼の凡神論の結果なり、されど群衆も亦萬物の中核より來りたるものなりと見るべきは凡神論の論

理的結果に非ずやと。我等も亦此言の一理あるを知る。若し凡神論の哲理に從へば英雄も、凡人も同じく是れ一理の發顯なり。謂ふ所の事實も、幻影も同じく是れ事實なり。何ぞ彼是を分ち異同を論ずべけんや。彼は此點に於て自語相違に陷れりと言はざるべからず。されど彼は論理に超絶す。彼は猶ほ英雄のみ萬物の中核より來り、事實の上に立つものなりと信ず。而して彼は又英雄のみ、眞理に立ち、眞理を話すものなりと信ず。彼謂へらく

唯だ眞理を話すこと、眞理の外の何ものをも話さぬことが滅亡より社會を救ふものなり。

深き信念は人をして眞理を語るもの、則ち英雄たらしむ。英雄は善く社會を救ふ。彼の英雄崇拜論は思ふに斯の如し。

カーライル論（九）

英雄既に世に生る。彼は何を以て群衆を導くを得べきや。カーライルは此に力の教理を說きたり。彼謂へらく『正しきことは力を作る』と。又謂へらく

總ての戰に於て、卿、若し其結果を待たば、各の戰士は其正しきことに從ひて榮ゆるを知るべし。

○

終には、而して最後の結果に於ては正しきものが則ち强きものたることを證せらるべし。

彼の說に依れば眞理は力なり、何となれば萬民は眞理に聽くべき天性則ち英雄崇拜心を有すれなり。されど萬民は直ちに眞理に聽くもの

に非ず。直ちに英雄を求むるものに非ず。故に英雄は先づ戰士たらざるべからず。彼は殉教者たらざるべからず。彼は眞理の松明を掲げて群衆の暗中に飛躍せざるべからず。彼は先づ力を發見し、力を顯はさゞるべからず。彼の『英雄崇拜論』は則ち此奮鬪史なり。彼の『佛國革命史』は力と大膽の顯現を歎美したり。故に彼に在りては力なき正義は論ずるに足らず、奮鬪せざる人物は英雄に非ず。故に彼に在りては正しきことが力なるが如く、力が則ち正しきことなり。故に彼は時として『正しきことは、何物にもあらず、我等の務は力の發見に在り』と云ひしことあり。力に伴はざる正しきことは彼に取りては誠に正しきことなりと云ひ得べきものに非りしなり。此の如くにして彼の信ずる所の英雄は力あるものなり、鬪士なり、自ら自己の運命を開拓するものなり。而して英雄は遂に世界を征服す。彼謂へらく

世界の歴史、則ち人間の此世界に於て做し遂げたることの歴史は其底に於て地上に努力したる英雄の歴史なり。彼等は人間の嚮導者なり。群衆が爲すべく若くは達すべく試みんとするものに模型を與へ、雛形を與ふるもの廣き意義に於て言へば創造者なり。我等が世界に於て成就し得たるものとして見る所のものは此世界に遺はされたる英雄の中に住める思想の顯現たる物質的進歩則ち是なり。彼の英雄崇拜論は其意實に此の如し。彼は法律と信條と改革の信者に非ず。彼は唯だ法律を立て、信條を作り、改革を做したる英雄を信ず。故に彼は立法者を信じて法律を信ぜず、祖師を信じて教理を信ぜず、政治家を信じて制度を信ぜず。法律、制度、信條、改革は影にして英雄はその實體なり、英雄一たび去れば凡そ此等のもの皆用ふる所なしとは、彼の深き深き信仰なり。故に彼は又古き信條、若くは古き制度に對して

は其過去に於て爲したる功績を認め、而る後『爾は腐敗したり、爾は過去のものとなれり』と云ふを常としたり。

カーライル論（一〇）

彼の英雄崇拜論は之を要するに「シーザリズム」なり。民主主義の思潮に逆行して專制主義を鼓吹するものなり。論者或は是を以て彼の心に浮びたる一種の迷信に過ぎずとせんか、我等は必しも其然らざるを信ず。何となればシーザルが其一人の力に依りて帝國の羅馬を築きコルシカ島の青年が其一劍を揮つてナポレオンの佛國を第十九世紀に現出せしめたるは疑ふべからざる事實なればなり。歴史は人間の心理的狀態を最も明白に反映す。彼の英雄崇拜論は矛盾を有する偏執の哲學なりと云ふは可なり。其說く所に全く一理なしと云ふは史學の證據を肯んぜざるもの也。歴史は繰返へす。孔子が民は之に由らしむべし、之を知らしむべからずと云ひしは、彼の見たる此事實を二千年前に於て道破したるものなり。イブセンが民政を信ぜず、集合主義を信ぜず、古きものは既に甦らず、新しき世界は唯だ個人の品性、個人の努力より來るべしとなし、ニッチェが超人論を唱へて世は群衆を足下に蹂躙し、群衆をして我意に順はしむべき超人のものなりと道破したるは彼の見たる此事實を彼に後れて捉みたるものなり。人間は今日に於ても未だ全く解決せられざる問題なり。人間の立てたる人間を律する主義は、今日に於ても、一是一非、紛々として未だ定まらざるなり。彼は自由、平等、友愛の謳歌せられ、民政主義の希望が最も強く高調せられし時に於て、民政主義の五臟六腑に癒すべからざる病あるを見たり。信ずる所なく、立つ所なく、畏敬する所なき群衆の大塊は畢竟何

の善きものを出すを得んや。彼は此の如く信じたり。故に一種の個人主義に執着して英雄崇拜論を唱へたり。故に『フレデリック大王傳』『クロンウエル傳』を著はして英雄則ち王たるの理論に史學の光を投げたり。『過去及び現在』を著はして中世を理想化し、賢主ウエリヤム侯の世を第十九世紀に復活し來らんことを望めり。彼は政府の王政たり、專制主義たり、民主主義たるを爭ふを以て無益の業なりとし、形式の變化に過ぎざる政治的改革を以て意義なきものなりとし、選擧權の擴張參政權の確保を冷笑して物質主義の變化とし、自由貿易の勝利を誇り産業の進歩を誇り、人口の加速的增加を誇り、利益に餳する個人の競爭を自由ならしむるを以て國民生活の幸慶を生むべきものなりとした る彼の時代の英國を以て何等の善き所なしとなし、此の如き自由主義を把持する自由黨の教理は日々增加し來れる勞働者階級の慘狀に對

しては何等の醫療を爲し得るものに非ず、却て豚に教ふるに鳴くことなしに死ぬることを以てするの類なりと喝破し、遂に

現代は其基礎に社會の依つて以て存在する標準を有せざる群衆の下宿屋に過ぎず。此群衆の各人は孤立し、其隣人を念とせず。各其隣人に抗して起ち、其自ら取得べきものを掴みて是れ我物なりと叫び、而して此狀態を平和と稱す。何となれば彼等は盜賊をなさず、彼等は盜賊よりも狡猾なる働を爲すが故に、外見上の平和は之が爲めに猶ほ存すればなり。友誼、協同とは現代に於てはかゝるものの存在し得らるや否やを疑はるゝ語なり。現代に於て人民の嚮導者、管理者と稱するものは其實、卿を嚮導し得るものに非ず。唯だ卿の在るが儘に在れと叫び得るもののみ。（サルトル、レサルタス）

と云ふに至れり。彼の信ずる所に依れば社會道德は金の義務を果た

すを以て終るものに非ず。商賣の約束に依りて自己の安全を保つのみを以て主義とする現代の社會組織に滿足するは人類をして野蠻に還らしむるの道のみ。彼は斯くして現代に失望し封建時代の中世に於て其理想を發見せんとせり。彼は賢人ウイリヤウ侯の智慧と德とに賴り其善政に服從する中世の人民を以て自由競爭の世、物質的滿足の世よりも、人らしき人の世、人の生活の天に近き世なりとしたり。彼は斯くして物質主義の英國を叱咤し、其同胞の醒覺を促したり。彼は此點に於て混濁せる空氣を清むる猛烈なる電氣なりき。モーレー氏曰く

近世の英國が新しき大なる危險に入りつゝある事實に盲目ならざりしは彼の光榮なり。

と。此言之を得たり。我等は此意義に於て猶ほ彼の新鮮を感ず。

エメルソンの智慧

萬物は默示なり。自ら語るものなり。

萬物は皆、自ら自己の歷史を畫く、轉岩は山に其痕跡を殘し、河は土地に其溝渠を通じ、動物は地層に其骨を遺し、蕨薇は石炭に其葉形を逗む。人間の各の動作は其同輩の記憶に記載せられ、其容儀と其顏とに記載せらる。智者は總て之を讀むことを得るなり。

自然なれ。（非巧論）

人は尊き內長質なり。甜くあることは砂糖には容易なり。鹹くあることは硝石には容易なり。

自然より出でゝ他人を顧みざる者は「偉人」なり。

人は內長質なり、敎育は其開發なり。

野蠻人若し一たび書を讀めば彼は亦プルタークの英雄を懷ふ能はざるなり。

活動するものは其活動の奴隷となる。

作者の意思以上なる思想より來れるものは神聖なり。諸ろの作者の最も善き部分は其中に自己の何物をも有せざる部分なり。其自ら知らざる部分なり。其身體の自然より溢れ出づる部分なり。其自己の發明創意より來らざる部分なり。

自信論

自己に信任せよ。何人の心も此鐵線に觸るれば鳴る。

爾の中に在る者を擴張せよ。

人の中に人を導く指針あり。

最も神聖なる法律は我中に存する自然なり。

俗世に於て俗世の說に從つて生活するは容易なり。野外に於て自己の說に從つて生活するは容易なり。英雄は之に反し、俗世に在りながら綽々として野外の獨立を有するものなり。

(一)社會の說に從ふこと勿れ。

(二)過去の自己に支配せらるゝこと勿れ。

(三)誤解さるゝを恐るゝこと勿れ。

人は何ぞ怯懦なるや。人は『余は思ふ』『余は此の如し』と云ふ能はずして數ば聖賢の語を引照するなり。何ぞ野花潤草を見ざる。彼等は自然の儘にして咲ふに非ずや。

總ては一の中心に集る、我等をして動搖せしむること勿れ。

人心の中に大なる海あり、人は之を知らずして、他人に一杯の水を求む。

此心歴史を作り、此心歴史を讀む。人心は同一なり、永遠の一部なり。歴史は主觀的ならざるべからず。

歴史の要は古人を今人の如くならしむるに在り、其處(ゼーア)に及び其時(ゼン)を此(ヒーア)處に及び今(ナウ)に易ゆるに在り。

歴史は一人の中に在り。

ヴアチカンに行くも、ネーブルスに行くも、人は唯人間の同一を見るべきのみ。

フイデアスの鑿、埃及人の鏝、モセス。ダンテの筆は皆我中に在り。

萬有神教論

我は萬物の中に在り、萬物は我の中に在り。

我は宇宙の一部なり、宇宙は我の全體なり。故に我の智慧は宇宙の智慧なり、宇宙の本源より流出するものなり。

花は落ち、花は開く、花は之に滿足す。

自己は卽ち最大原因たる宇宙の本體の一性格に過ぎず。

祈禱は自己の内に在る神の靈が自ら其事業を善しと宣言する者なり。

人は神と一と爲りし時他に願ふ處なし。

總ての作業は祈禱なり。農夫の地を耕すも、舟子の楫を執るも。

流轉論

昨は笑ひ、今日は哭す一人の我れに非ずや。昨は死人の如く眠り、今朝は起ちて走る一人の我に非ずや。

勢力は安息の瞬間に於て止む、而して一の過去より新しき狀態に至る間に靜止す。水煙の灣中に上るが如く再び一の目的の爲めに出づ。

――人の外に自然の勢力あり。人の中に自然の勢力あり。是れ永遠亙る者なり。

に我船は沈めり。是れ他の海に行かんが爲めなり。

本能論

智慧は宇宙の本源より流れ來るものなり。

時間と空間に超越し死生苦樂の羈絆を解脱するものは天地の奥より人心中に顯れたる本能なり。

人間の行爲は二なり、『ダイレクト』(直接)『レフレックト』(思慮)。而して其最も人心を感ぜしむるものは『ダイレクト』の行爲なり。

宗教論

宗教は今の宗教ならざるべからず。我が宗教ならざるべからず。混混として宇宙の本源より流れ來れる今日の宗教ならざるべからず。神と人との間には中間物あるを要せざるなり。神と共に今日生存せよ。野花潤草の現在に咲ふが如くなれ。

萬物我に備はる

鳥の羽翼が空氣を豫定する如く人は天地を豫定す。天地の心は一也。

差別無差別論

差別を見るもの、事實と表面とを見る。——才能及び事業の人。(此世界の人、實際の力の人)、

無差別を見るもの、萬物の一體を見る。——信仰及び哲學の人。天才の人。(理想に住む人)、

精神と形式。目的と方法。

河は自己の岸を造り、各の理想は自己の溝渠を造る。

活動の程度を計るものは、之を生じたる感情の程度なり。

人は活動す、而して其活動の奴隷となる。

第一の活動は經驗なり。第二の活動は禮式となる。向上、敬虔の念は

禮典を生ず。而して禮典は向上敬虔の念を殺す。

原因は結果と分つべからず。方法は目的と分つべからず。種子は菓實と分つべからず。結果は原因の中に存し、目的は方法の中に在り。

豪傑論

豪傑は大なる人なり。幅と長さの大なる人なり。必しも創意の人に非ざるなり。

英雄は凡人の累積なり。事功の堆積したるもの也。

最も大なる天才は最も多く他人より恩惠を蒙りたるものなり。

偉人は彼の時と彼れの國とに一致するもの也。

天才は彼の同時代の理想と必要とに驅られ、思想と事件の海に浮ぶものなり。

彼は總ての眼の見る所に立つ、彼の行く所は總ての手の指す所也。天才は自己の動くよりも、自己を通じて大勢の動くものなり。

彫刻者が其同時代の神殿より學ぶが如く天才は其同時代より學ぶもの也。

戀愛論

人生の「エンカントメント」(恍惚、失魂)を生ずるもの。或る時期に於て人の心を捕へ、其心と體とに革命を行ふもの。

人を人類に結ぶもの。

萬物に新しき興味を與ふるもの。創思を開くもの。英雄的の行爲を皷舞するもの。

非文明論

社會は新しき技藝を得たり、而も之と共に古き本能を失へり。

文明なる人民は車を造れり、而も之と共に脚の力を失へり、

彼はゼネバの時計を得たり。而も日影を見て時を計るの熟練を失へり。

グリンウイッチの星暦は發行せられたり。而れども彼は星に就きて無智となれり。

彼の「ノート、ブック」は彼の記憶力を傷りたり。

彼の文庫は彼の智慧を弱くせり。

基督教は野性的道德の力を失へり。

人は社會と離るゝのみならず、又其書齋と離れざるべからず。直ちに自然に返らざるべかず。

非社會論。非教會論

社會は合資會社なり。其株主は麵麭を得るを目的とするものなり。

自由を此目的の爲めに賣るものなり。

社會の最大なる道德は一致なり。ピタゴラス。ソクラテス。耶蘇。ルーテル。コペルニカス。ガリレオ。ニウトンは非一致家なり。

人は說教者が教ふるよりも多くを知るものなり。

人は其神學よりも善きもの也。人は其知る處よりも賢きものなり。

露國及びトルストイ伯（一）

我等は信ず。日本帝國は其思想の領域より云へば世界の一州に相違なきが故に日本帝國、若くは日本人種と云ふ小さき範圍を限りて特別の哲學、感情、信仰をのみ食はんとするは風と雲とに一定の區域を作らんとするよりも愚かなる業なりと。但し我等は之と同時に日本帝國は久しき歷史を有し而も生氣の充滿したる一個獨特の共同生活體にして世界の思想を消化して悉く日本的のものとなし得る機能あるも

のなりとも信ず。此機能を普通の語にて云ひ現はせば則ち批評の力なり。或人の說きし如く日本帝國の位置は世界の田舍なりとも云ひ得べし。されど我等は世界の田舍漢なるが故に自ら其耳目を競ひ世界に於ける最高の文明に觸れ、世界の最大なる文學に接せずして已むべきや天下勿論此理あるべからず。されば我等は日本人民の一人たる立場より遠慮なく世界の總ての思想、總ての技藝を批判せんと欲す。是れ先づ此處にトルストイ伯を論ぜんとする所以なり。

露國及びトルストイ伯（二）

我等のトルストイ伯を論ずるは獨り世界の思想家として之を取扱はんとするには非ず我等は又日本帝國の愛すべき友邦たり、若くは或場合に於ては恐るべき敵國たり得べき露西亞帝國の近世史を組織する一個の大なる要素として之を研究せんと欲す。一莖の植物も其發生したる土地を暗示す。地を離れて草木なく、國を離れて英雄なし。我等はトルストイ伯の中に露西亞帝國を發見す。露西亞人は世界に於て最も小兒らしき人民なり。小兒が一物を注視する時に全く他物の傍に存在することを忘るゝが如く、露西亞人は或る目的に向て突進する時に、其前面に横たはれる總ての障碍を無視す。たとへば露國の虛無黨が僅に數人の露帝を殺し得れば則ち露國革命の事成り得べしと想像するが如し。彼等は同時に二の問題を考ふる能はず。左に進むときに右を顧みて其歩を調節する能はず。彼等は是故に日本を侮りて突進し、却て不意の敗北を取りたり。彼等は是故に多くの偏理偏情の詩人を出せり。我等は此點に於てトルストイ伯が最も濃厚に彩色したる露西亞的露西亞人なるを見る。何となれば彼の議論は極めて

獨斷的にして、直截簡明なる前提より直ちに其論理の到る所を窮め、放言高論、自ら快とし、復た悔ゆることなく、復た返ることなければなり。されば我等はトルストイ集を讀む毎に『談何ぞ容易なる』てふ一種の輕侮を感ぜざることを得ず。トルストイ伯は一個の道理の中に沒入して他の總ての道理を忘る。伯の露西亞人に通有なる短所を有するは此に在り。伯の文人として其名一世を掩ふ所以も此に在り。而して伯の理想の『言ふべくして行ふべからざる』ものたる所以も亦實に此に在るなり。

露國及びトルストイ伯（三）

露西亞帝國は地圖の上に於ては歐羅巴洲に屬すれども文明の種類に於ては寧ろ波斯、若くは印度、若くは韃靼、若くは蒙古に類するものなり。露國を旅行するものは其田舍には今日と雖も猶ほ人の運命を說くを業とするものゝ彷徨するを見るべし。露西亞の農夫の中には今日と雖も川に漁する時は河の神を慰めんが爲に犧牲を獻ずるものあり。家族の幸福を祈らん爲に家の神を祭るものあり。露西亞の農民の多數は人をして支那の古に行はれし井田の法を想像せしむるに足るべき幼稚なる共產主義の土地法に服從し、人々布衣昆弟の情を以て相交る。勿論露西亞の政府と官吏とはピーター大帝以來西歐の語を話し、西歐の文明を採用し、露西亞の各地亦獨逸人種の移住を見ると雖も純乎たる露西亞人は依然として東洋的なり。故に其思想と感情に於ても亦多くは東洋的ならざることを得ず。試に露西亞の國敎たる希臘敎會以外の異端に就て其如何なる傾向を有する乎を察せよ。

（甲）「ダウコーボリ」派（敎派の名）　露西亞の南方に行はる。理と愛とに

從つて生活すべきことを主張し、人性の中に神性を存すとなし、耶蘇の神なりと云ふは則ち耶蘇てふ大なる人物の性中に神性あるに外ならずとなし、耶蘇教會に行はるゝ總ての教理、儀式、權威の無用なることを說き男女の權利を齊くし、小兒を老人と同じく尊敬すべきものとし、自由結婚を唱ふ。

(乙)「スコプトシイ」(教派の名)　露西亞の北方に行はる。禁慾主義の教派にして難行、苦行を以て聖に達する道とすることは亞細亞の諸宗教に似たり。

(丙)「サウタイエフスキイ」(教派の名)　一個の單純なる農夫にして石工たるバシル、サウタイエフの唱道したる所なり。一視同仁、偏なく黨なく、平等に億兆を愛憐するを以て教理とし、洗禮、婚禮の如き總ての儀式を否定す。而してその信者の夫婦たらんとするものあるや其教長は僅に簡單なる祝福を與へ、夫婦心を一にして美しき生活を送るべきことを勸告するのみ。此教派に於ては總ての宗教的儀式は人をして僞善的ならしむるに過ぎずとし、天使、惡魔の如き凡ての超自然的存在を信せず、來生の問題に關しては絕待的に無頓着なり。此宗派の說く所に依れば人間の務は地上に幸福と正義とを植うるに在り。而して此の如き人類の道德的復活は實に社會問題、經濟問題と密接なる關係を有す。現代の法律に規定する個人の財產權は實に人類間の憎惡、嫉妬、不幸を激成するものなり。凡て財產の所有者たるものは先づ人爲的の法律に依りて自己に屬するものとして定められたる其土地に對する權利を拋ち獨り勞働に依りてのみ生活せざるべからず。人間の道德的復活は實に此に始まる。されど此目的を達する手段は如何なる場合に於ても暴力に依るべからず、

唯だ人心を根柢より改革し得べき徹頭徹尾平和なる勸誘に是れ依るべきのみ。凡そ我好兄弟の社盟に加はらんとするものは豫じめ自己が從來營み來れる生活の僞善にして且不義なるものたりしことを明かに告白せざるべからず。既に此道理を覺り得ながら猶ほ故意に服從せざるものは社盟より除外すべきのみ。是れ彼等の信條なり。而して此信條の根本的思想は實に人類社會を以て一個完璧なる大家庭的生活なりとし此生活の眞の意義は愛なりとするに在り。此敎派は又此世界的愛人主義の結果として兵役に就くことを忌避す。何となれば總ての國民、總ての宗敎に屬するものは悉く兄弟なればなり。

吾等は此等の敎義の中に多くの西歐的色彩を見る。されど其根底は實に東洋的なり。何となれば此等の敎義は他の東洋の敎義に均しく利用厚生(卽ち生活を善くするの道)を以て根本的原理とし西歐の個人主義なるに反し家人父子の情を以て其社盟を結び、西歐の哲學的、想考的なるに反し、寧ろ經濟的、實行的なるのみならず、其敎理も亦極めて獨斷的なればなり。我等は此の如き敎派を背景として我トルストイ伯を觀察せざるべからず。我等は空氣を除外にして鳥の翼を說く能はず。トルストイ伯は實に東洋的なる露西亞に在りてその空氣の中に翼を廣げたるものなり。

露國及びトルストイ伯（四）

トルストイ伯は嘗て一たび深刻なる懷疑に陷りたり。伯は運命の網の人を廻りて解脫する能はざらしむるを見たり。伯は多くの人のさる運命ありと自覺せずして而も避くべからず抗すべからざる力の爲

に破碎せらるゝ悲劇を見たり。一言にして說けば伯は深く死生の問題に觸れたり。伯は遂に絕望の聲を以て叫びぬ。曰く人生に於て眞實なるものは唯だ死てふ一事のみ。人は死すべきものなりてふ命題の外は唯だ幻影たるに過ぎずと。伯は釋迦の感じたる如く人生の電光、石火に過ぎざることを感じたり。多くの東洋思想が敎ふる如く人生の唯だ悲劇に過ぎざることを深く且强く感じたり。其結論の結果は唯だ厭世あるのみ。唯だ自殺あるのみ。されど伯は此に止まらざりき。曇の後には晴あり。陰の前には光あり。伯は極端の厭世觀より極端の樂天觀に移りたり。伯は自ら死に就て思慮を勞することの愚なることを感じたり。伯は謂へり。死てふ問題は千年萬年の昔より、萬人、億人が不論を以て解決したる問題なり。彼等は鐵を掘出せり、牛馬を馴らして之を用ひたり。土地を耕したり。樂しき共同生活を營みたり。されど彼等は死の何ものたるかを考へず、且議せざりき。何となれば彼等は死を以て議すべからず、論ずべからざるものとしたればなり。否彼等は死生を以て解釋すべからざる秘義として樂んで其運命に順ひたればなり。我等は彼等の中に育ち、彼等の思想と言語に依りて敎育せられながら彼等を稱して不合理となす。彼等の不合理なるには非ず、我等が彼等を理會する能はざるのみと。斯くて伯は平然として生れ、平然として死する無邪氣の農夫に就て其安心の秘密に達し、古人の如く死生の問題を不論に付し、全く東洋的の安靜に達するを得たり。夫れ六合の外を論じて議せざるは老莊の安心法なり。死生を論ぜず、窮達を議せず、命に安んじ天を樂むは孔孟の世に處する所以なり。天に達せんとしたる水蒸氣は終に地に還れり。嘗て一たび死生の問題に其心を捉へられたる伯は遂に死生の問題を超越したり。

伯又謂へらく人は知識に於ては神なしと云ひ得べし、されど生活にて於ては神ありとせざるを得ず、人は生命あり、生命の源は神なり、神は生命なり、人既に自ら我は生命を有すと云ふ時は是れ我は神を知れりと云ふに外ならずと。哲學と思索に依りて神に達せんとしたる伯は遂に神を摸索し得ずして生命に還れり。生命の源頭を尋ねて却て神に達したり。人を知るは卽ち神を知るなり。此點に於ても伯の思想は濃厚なる東洋的色彩を帶ぶ。

露國及びトルストイ伯（五）

伯は既に死生の問題を不論に付し、其注意を人生其物に集中したり。伯は人の生命の中心なる理性に達したり。此點に於て伯は昔の中庸の作者の如く人性は道理を覺る力あり、此力こそ如何なる問題をも解釋し得べき鍵なりと信じたるものなり。伯は理性に反する信仰を以て狂氣に過ぎずとなし、理性は幻影にあらず、狂氣に非ず、其權威は何ものも抗すること能はずと云へり。而して伯は耶蘇の山上垂訓は則ち全く此理性に合したる無上の敎訓なりとせり。伯は此信念に依りて其有名なる著作たる『我宗敎』を出して世に問へり。伯の信ずる所に依れば耶蘇は一種の社會改革家なり、其理性の導く所に從て革命の火を人生に投げ入れたる革命家なり。現代の基督敎會が理性の敎ふる所に反したる社會制度を保護せんとするは耶蘇の敎ふる所に背馳したるものなり。伯は是故に今日の基督敎は毫も好愛すべき所なしと謂へり。伯の信ずる所に依れば露西亞人が其露西亞人たるが爲に土耳古人、若くは獨逸人を殺さんと足を擧げて出で行くことは理性に反するものなり。自己、若くは自己の家族が流行の衣裳を競ひ客間の

粧飾を華麗ならしむる爲に他人の勞力を用ゐるは理性に反するものなり。其心、既に腐敗して全く邪徑に陷りたる人民を捉へて其腐敗と邪曲とを更に甚しからしむべき牢獄に投ずることも亦理性に反することなり。されば所謂歐洲の生活は此の如き反理性の權化たるに外ならず。反理性の生活は又耶蘇の敎に反する生活なり。故に又基督敎の名を蒙りたる俗惡の敎なり。伯は此意味に於て所謂正統敎會に對して正面より反旗を揭げたるのみならず、伯は更に山上垂訓の意を汲んで四個の格言を作れり。曰く惡に敵することなかれ。曰く人の罪を定むることなかれ。曰く怒ることなかれ。曰く唯だ一個の婦人をのみ愛せよと。伯は此四個の格言だに具體的に世に現はるゝことを得ば國家、社會なしと雖も可なりとせり。否伯は國家、社會の存在を以て人生に不幸を生ずべき淵源なりとせり。我等はトルストイ集を讀む毎に國家を否定し、法律を呪咀し、人生を原始の狀態に還原せしめんとし、聖人死なずんば大盜已まずと唱へたる老莊學を聯想せざることを得ず。伯嘗て書を『評論の評論』記者ステッド氏に與へて曰く、『國家は虛僞なり、卿の政府と呼ぶ所のものは幻影なり、何をか國家と云ふ。予は其何等の實質なきものなるを知る、人間は予、之を知る、農夫及び村落は予、之を見る、されど政府と云ひ、國民と云ひ、國家と云ふものは何ぞや。是豈不正直なる官憲に依りて正直なる人間の所有を掠奪することを蔽はん爲に狡兒の發明したる虛名に外ならざるに非ずや』と。伯の信ずる所に依れば法律、裁判、牢獄は國家と共に存し、國家の消滅と共に消するものなり、愛國主義は虛僞なり、此虛僞の滅すると共に戰爭も亦滅すべしと云ふに在るものゝ如し。嗚呼談何ぞ容易なるや。國家果して伯等の信ずる如く虛僞ならば、所謂愛國者なるものは千年萬年單に雲

霧に均しき虚名の爲に犧牲となりたるものなる乎。所謂英雄豪傑の事業は單に沙の上に築きたる城なる乎。伯は國家を解き社會を滅ぼしたならば人生は幸福なりと想像す。老莊は二千年前の昔に於て曾て此の如き理想を有したり。老莊の書は二千年の間支那人の讀む所たりき。而して其想像は二千年後の今日に於てすら未だ嘗て毫末も實現せられざるに非ずや。希臘、羅馬の哲人も亦嘗て二千年の前に於て原始的人間の幸福を想像したり。古典は二千年の間歐洲人の讀む所となり。されど二千年後の今日に於てすら歐洲に於ける國家の威權は猶ほ古典の如くなるに非ずや。我等は是故に伯の理想は要するに眞理の全體に非ずして其一片に過ぎずと信ず。伯は眞理の一片を見て其全體を見ず。人間の理性を見て其獸性を見ず。東洋の哲學者が夢想したる如き安靜の幸福を夢想して弱肉强食の半獸的社會を見ず。伯は到底ルーソーの如く、老聃の如き夢想家たるを免れざるなり。されど伯は此の如き單純にして、寧ろ無邪氣なる無政府主義的敎理を固執し現代の社會を維持する宗敎道德を罵りて俗世の敎理と稱したり。伯は言へり。俗世の敎理は予が四個の格言に約したる山上垂訓よりも寧ろ從ひ難きものなり、予の未だ眞理を覺らざるや嘗て俗世の敎理に從つて身を處しき、而して予が生活の最も苦痛を感じたるは實に此時に在りき、予は學生たりし時、その夜遊に加はりその決鬪に參したり、予は又軍人として國と國との大戰に加はりたり、予は自己の生活を無慈悲にして理性に反するものなりと感じたり、是れ皆予が俗世の敎理に從ひたる時に生じたる苦痛なり。俗世の敎理に從ふものは此の如き苦痛を忍受すべき一種の殉敎者たらざるべからず、嗚呼三千萬の生靈は俗世の敎理の爲に戰鬪に從事して亡びたり、數千萬人は俗世

の教理に基きて構造せられたる社會組織の下に壓碎せられたり、人類の蒙りつゝある不幸の十分九は人類に取りて何の用なき虚僞の信仰の爲に起りたるものなり、哀れむべし、人類の大多數は俗世の教理の殉教者たるに過ぎずと。我等は之を讀む毎に恰も現代語を以て莊子を飜譯したるものなるが如く感ず。莊子は國家、社會を以て人間の幸福を毀損すべき人爲の障碍なりと信じたり。トルストイ伯の言、何ぞ獨り異とすべけんや。國家社會の存在する以上は其犧牲を生ずべきは勿論なり。されど是れ唯だ國家社會の暗き半面のみ。其實は人間は國家、社會てふ藩籬の下に在りて始めて宗教を生じ、道德を生じ、理性を生じたるのみ。伯が人生問題を解釋すべき鍵なりとする理性なるものも進化論の研究に從へば要するに國家社會の存在が生み出したる結果のみ。今や國家、社會の產兒たる理性を以て出發點とし却て國家社會の存在を呪咀せんとす。我等は遂に伯の信者たること能はざるなり。されど伯の思想は多くの信者を生じたり。伯の著述、殊に其廉價なる小冊子は翼なくして露國の千村萬落に飛べり。獨り露國のみならざるなり。伯は世界の思想家となれり。日本の思想家、文人すらも伯の無政府主義に觸れたり。是れ其故何ぞや。他なし、伯の論法の極めて單純にして直截簡明なるが爲のみ。伯の說く所は勿論、眞理の全面ならざるも、而も眞理の一面なるが爲のみ。試に我等をして伯が何故に此の如き人望を有する文人たりしかを解剖せしめよ。

露國及びトルストイ伯（六）

トルストイ伯は其系圖の如何に拘はらず醇乎として醇なる露人なり。

露國は農民の國なり。露國の農民は僅に農奴の境界を脱したる未開の人民也。彼等は非凡なる腕力を有し、古き習慣を固執す。彼等は宗教的なり。彼等は運命と戰ひ、境遇と爭はずして寧ろ其慾むべき位置に滿足す。彼等の善德も自然放棄にして、彼等の惡德も亦自然放棄なり。英語に所謂 Resignation (運命に順ひて爭はず)は彼等の宗教にして彼等は眞に自然を樂しむものなり。彼等は井を鑿りて飲み、田を耕して食ひ、單純なる物質的滿足に甘んじ法律及び官憲に對して極めて無頓着なるものなり。トルストイ伯の無政府主義的傾向は實に此國民的性格に合す。是れ其大に歡迎せらるゝ所以の一なり。獨り是のみならざるなり。露國の農民は西歐の個人主義を解せず、彼等は今日と雖も村落を以て一個の共產社會なるが如く見做し、土地は萬民の共同財產たらざるべからずてふ古き信仰を失はず。トルストイ伯の土地共有主義は正に此國民的性情に合す。其農民の歡迎を得る亦宜ならずや。獨り是のみならざるなり。伯は文學者の側より云へば自然主義者なり、寫實家なり。伯の思想は極めて偏頗なる畫夢に過ぎざれども伯の寫したる社會の光景は露國社會の寫眞なり。夫れ伯と略ぼ時を同うする露國文學者の寫實派たる必しも伯に限らざるなり。たとへばドストイエフスキイの如きは深刻なる科學者の眼を以て人の性情を研究したるものなり。我等は彼の著述に接する毎に其殆ど病的なる精細の人心描寫に接して恰も囚人の苦惱を聽くが如く、シベリアに於て死人の家の叫喚に惱まさるゝが如く感ず。彼は人心を飜弄し腐蝕する大小の原因を解剖して微小の點だも漏らさざらんとす。彼は此點に於て人の內景の寫實家と謂ふべし。ツルゲネーフの外界に對する感觸は餘りに鋭敏なり。彼は小女の纖手が細き針を以て絹手

巾の緣を綴るが如く、纖細にして多感なる心を以て正直に其見たる所を寫す。彼謂へらく、小說は總ての虛構、總ての誇張、總ての修飾を掃ひ去りて唯だ人生の歷史たりてふ單純にして而も高尙なる目的を有せざるべからずと。彼も亦此點に於て寫實家たるなり。ゴーゴルは人生の瑣事を浮彫にし、平凡の人物、尋常茶飯の事を記述して紙上に活躍せしむ。彼はヂッケンスの書籍よりも多く人間を學びたるが如く人間を學びたるものなり。されば彼も亦此點に於て英國流の寫實派なりと謂ふべし。されどトルストイ伯の自然派たり、寫實派たるは彼等よりも甚し。伯は其自序傳の一種なる『懺悔』に於て記して曰く

此世界に於ける不德及び罪惡にして余の行はざるものなし。詐ること、盜むこと、總ての種類の道樂、不節制、婦人の節操を破るべく强迫すること、殺人、總て之を行へり。予は我領地に於て生活せり。予は飲酒に耽り、骨牌を弄し、斯くて農民の勞働に依りて生じたるものを徒費せり。予は彼等を賣りたり。彼等を欺きたり。而して予は此行爲の爲に賞讚せられたり。

と。讀者若し之に依りて伯の青年時代は放蕩不檢、亂行を極めたる貴公子なりとせば、そは勿論伯を誤解したるものなり。伯の『懺悔』はたとへばバンヤンの『天路歷程』の如し。伯のバンヤンと均しく多情多感なる、自己の心に負ひたる小さき創を大きく感じ、自己の爲したる小さき罪惡を大なる罪惡として恐怖したるもののみ。されど『懺悔』の一篇が明かに示すが如く伯は多樣の境遇を經たり。多樣の社會を見たり。多樣の誘惑を蒙れり。伯は大學に遊びたり。田舍の領地に住みて親しく農民に接したり。無邪氣なる農女に懸想したり。伯は嘗て風光

絶佳にして奇怪なる古代的習俗を有するカウカサスに駐在したり。伯は又セバストポールの戰士たりき。伯のカウカサスに在るや、其風俗人情を寫して紙上に活躍せしめたり。其著『コサック』なるものは伯が自然の何ものたるを解し、自然的生活の何ものたる乎を解し得たる寫實派文人としての技倆を示し得て餘あるものなり。健康にして粗樸なる若き『コサック』兵、美しくして、而も男兒の如く强壯なる『コサック』の女性、老年の獵夫は恰も自然の中より拔け出でゝ伯の筆に移りたる如く活躍せり。千秋萬古、消ゆることなく解くることなく、人間の足跡を印することを許さゞるコウカサス山巔の恒雪は伯の目睫に迫れり。開闢の始の如くなる源始的の美貌を有する自然の威嚴ある女性は伯の驚異を促がせり。伯は此の如き山中の生活と都市の生活とを對照して人間の幸福に關する秘密を學びたり。幸福とは自然と共に棲息することとなり、自然を見ることとなり、自然と語ることとなりと感じたり。而して自然の中に育ちたる自然の兒たるコウカサスの美はしき小女と一致して分つべからざる生活に入ることは幸福なることとなるべしと想像せり。伯は此想像に依りて『コサック』編中の主人公たるオリエニンを鑄り成せり。文明の子、都市の中に育ちたるオリエニンは「コサック」の女子マリヤナを戀したり。都市の人爲的生活を離れて山中の自然的生活に入り、自然の寵兒たる山中の女子と共に棲まんと欲したるは是れオリエニンの理想なりき。されど彼は遂に其不可能なることを發見せざるを得ざりき。彼は言ひぬ。

予にして若しルカスカ(マリヤナの意中の人)の如き「コサック」兵となり得たらんには、予にして若し馬を盜み、赤葡萄酒に酩酊し、卑穢なる歌を歌ひ、醉つて彼女の窓に這ひ得たらんには、予とマリヤナとは互

に相理會するを得べく且互に幸福なることを得べし。されど彼女は予を解する能はず。彼女が予を解する能はざるは彼女が予よりも劣れる種類のものたるが爲に非ず。自然は彼女をして予を解せざらしめたり。彼女の心は輕快なり。彼女は自然の在るが如く自然なり。彼女は靜かなり。穩かなり。彼女は自ら滿足す。されど不完全にして弱き動物たる我等は徒らに我等の邪念と煩悶とを彼女の理會せんことを求む。

ルカスカの心は則ち伯の心のみ。伯が山中の自然に心醉し、其小女に心醉し、一たび其心鏡に寫りたる繪畫の常に活躍して拭ひ消すべからざるものとなりしや想ふべきに非ずや。斯の如くにして伯は多樣の境遇に接したり。多樣の境遇を寫したり。露西亞の生活は伯の筆に彩られて白日青天の下に其秘密を暴露せり。斯くて佛人がゾーラに依りて自己の像影を見たるが如く、露人はトルストイ伯に依りて、恰も鏡に照らして自己を見るが如く見ることを得たり。伯の著述が露人の歎賞する所となりたる秘密の一は實に此に在り。一言にして言へば伯はゾーラの如く忠實なる自然派たりしが故に文學上の著しき成功を得たるのみ。

露國及びトルストイ伯（七）

然りと雖も我等にして若し伯の文學上に成功したる原因を說くこと此に止まらば是れ唯だ皮想の觀察のみ。我等は更に進んで伯の堂奧に上らざるべからず。我等の學ぶ所に依れば伯の理想の殆んど言ふべくして行ふべからざるものたるに關せず、伯の視たる所は眞理の一端にして其兩端を叩き盡したるものならざるに關はらず、伯をして名

を成さしめたる秘密は伯の大なる「ヒウマニスト」たるに在り。獨り伯のみならざるなり、凡そ現代の文豪にして一世の雄たるもの誰れか「ヒウマニスト」なるざる。たとへば佛國に於ける「ローマンチック」派の驍將たりしヴイクトル、ユーゴーの著述が一世を動かしたる所以、若くはユーゴー一派を文學上の勁敵として寫實派の赤幟を文壇に立てたるゾーラが花の如く火の如くなる文名を天下に傳へたる所以も詮じ來れば共に四海一家、萬民兄弟てふ人情主義を鼓吹したるが爲に非ずや。乃ち露國の文豪の如きもドストイエフスキは人を憐み、人を愛するの情に滿ちたる平民主義の傳道師なり。ツルゲネーフの憂鬱性も亦農民生活に對する同情の爲に泣かんとしたるものなり。マコレー卿は嘗てルーソー、ボルテーアの如き第十八世紀の文豪が思想界の大波瀾を捲き起し、宗教改革以後の大事件たる佛國革命を生じたる秘密は實に彼等が人情主義の友たりしが爲なりと云へりき。歴史は此にも同じ現象を再現せり。凡そ近世の文豪にして人民の心に無限の反響を喚び起したるものは誰れか「ヒユーマニスト」ならざらんや。而してトルストイ伯は此意義に於て最も大なる「ヒユーマニスト」の一なりき。ルーソー、ボルテーアが中等階級、市民階級の爲に萬丈の氣焔を吐き、自由、平等、友愛の新しき信仰を掲げて舊思想の野を燒き拂ひたるが如く、トルストイ伯は農國の最も低き勞働者たる水呑百姓の爲めに其人間たる威嚴を主張せり。伯の哲理をして百の過失あらしめよ。伯の無政府主義は事實の根底に立たざる蜃氣樓たらしめよ。伯の總ての立言は言ふべくして行ふべからざるものたらしめよ。唯だ伯が平民の中に住み、平民を愛し、平民の爲に言はんとする大なる「ヒウマニスト」たる態度に至りて正に近世の思潮に鞭ちたるものな

りと言はざるべからず。様々の哲學は起れり。様々の主義は流行し、且衝突せり。されど現代人の思想の底に潜める主義は唯だ一なり。則ち人は其位階に依らず、其所有に依らず、たゞ人なるが故に、尊貴なりてふ自覺是なり。伯は此自覺を刺擊して更に益す明瞭ならしめんとしたるものなり。伯は嘗て「サウタイエフスキイ」派の創立者たるサウタイエフに逢へり。此農夫にして教師たりし人物の生活は伯に大なる興味を供へ、伯の人生觀を一變せしめたり。試に左の一話を讀め。

一夕乞丐の婦あり。サウタイエフの戸を叩き一夜の安息を得んと求めたりしが、サウタイエフは其請ふがまゝに食物と安息の場所とを與へたり。明くる朝、サウタイエフ一家のものは悉く田圃に出で勞働に從事せり。跡に殘りし彼女は是を好機會とし、其手に持ち得るだけの品物を携帶してサウタイエフの家を遁れ出でたりしも途中にて勞働に從事し居たる農夫の怪む所となれり。農夫は彼女を抑留し、其携へたる包を檢査し、その盜みしたるものなることを確め、則ち其雙手を縛し、地方官の廳に連れ行かんとしたり。サウタイエフは此狀を見ていそぎ農夫に近づき、『何故に其婦を捉ふる乎』と尋ねたり。農夫は『此婦は盜なり。罰せざるべからず』と答ふ。サウタイエフは此語を聞き儼然として容を改め、『人の罪を定むること勿れ。卿等若し人の罪を定れば卿等も亦其罪を定めらるべし。我等は總て罪あるものなり。卿等試に思へ、其婦を罰したりとて何の善きことありや。其婦は其罪に依りて獄に投ぜらるべし。されど牢獄は果して何等の善を人生に齎らし來るべきや。如かず其婦に食ふべき物を與へ神の恩寵の下に行かしめんには、これ其婦を獄に投ずるより善事なるに非ずや』と。此一語に依りて乞丐の婦は其罪を問は

れざりき。

此美しき逸事は一個の純粹なる農夫の心にも神に均しき威嚴の潛むことを示すものに非ずや。伯は是に依りて人生の眞意義を學べり。是に依りて一個の平民の心にも國家の權威を超越し、法律の束縛を解脱せんとする尊貴なるものの存することを知れり。伯の人生觀は最も强く此意義を捉みたり。伯は是に於て人生を幸福ならしむる最も大なる條件は勞働なりと看取したり。伯謂へらく勞働は幸福なり、智識上の勞働は其勞働に從事するものが自由に之を選びて、自由に之を好むものなるが故に勞働其物が直ちに幸福なり。(たとへば學者は學問の研究、其事を以て直ちに幸福なりと感ずるが如し。)形體上の勞働も亦人間自然の要求にして適度の勞働は身體に快樂を與へ、善き消化力を生み、安靜なる眠を生むものなりと。伯は更に此意義より勞働の神聖なるを主張し、勞働に從事するものゝ人間の本務を盡くしたるものなることを主張し、總ての人は皆勞働すべしと主張し、自ら勞働の甘味を味はざるものゝ所謂社會改良事業は何等の效果をも生ずるものに非ることを主張し、富人の不幸なる生涯を畫き來りて、懶惰なる貴族的生活の悲慘なる半面を遺憾なく暴露せしめたり。伯謂へらく

富人の生涯は幸福の生涯に非ず。富人は禮儀、習慣の爲に桎梏せられ、單純にして自然なる生活を營むこと能はず。農夫は其同輩の幾百萬人と爾汝を以て相呼び、平等の親和なる交誼を結ぶことを得ん。されど兄弟の如き平等の交誼を結び得べき範圍は其人の屬する社會階級が高くなる程狹隘に赴く。斯くて王侯の貴きに至れば對等の交際を爲し得るもの、殆んど一人もなく、其生活は殆ど牢獄の生活に均しき寂寞を極めたるものとなる。

○

富人と雖も事業を有せざるに非ず。されど彼等の事業は通例官府的、若くは行政的の義務を行ふものに非れば煩勞なる社交の俗禮を守るものたるに過ぎず。彼等は彼等の門前の雪を拂ひつゝある僕隷の輕快なる心を以て働くが如く働くこと能はざるなり。

トルストイ伯の目より見れば貴族の生涯は俗禮の籬籬を脱する能はざる牢獄の生活に均しきのみ。自己の食物には餘あるに、他人の食を得ざるを坐視せざる能はず、自己は二の上衣を有するに他人が下衣だに有せずして凍ゆるを等閑視せざる能はざる貴人の生涯は罪惡の生涯のみ。所謂社會改良家なる小仁、小義の信者が自己の小兒をして何事をも爲さゞる懶惰の生活を營ましめ、而も自ら侮ゆることを知らず、却て他の人民及び小兒の狀態を改良せんと試むるは不合理の甚しきものゝみ。伯は此の如くにして勞働の神聖を主張し、萬民皆勞働せざるべからずと主張せり。貴人は賤民を指して、洞穴に住むものなりと云ふと雖も、知らず尊貴なる生活を營むものは貴人なりや、抑も亦所謂洞穴に住む賤民なりや。懶惰の生活を送りて不德の結果の外何ものをも人生に寄與せざる貴人は、所謂洞穴に住む賤民の、彼等自身、若くは他人の爲に常に勞働しつゝあるに比すれば最も賤しむべき有害無益の生活を送るものに非ずや。伯は此の如き見地に立ち、總ての人の勞働を要求せり。是れ豈次第に覺醒し來りたる平民の爲に長虹の氣を吐くものに非ずや。伯の大なる「ヒューマニスト」たる所以は實に此に在り。伯は又此見地に立ちて婦人問題を解釋し、婦人の位置を改良するの途も亦唯だ之に勞働を與ふるに在りとしたり。伯は嘗て一個の娼婦に逢ひき。彼女は病んで將さに死せんとする其友なる一婦人の

小兒を養はんが爲に自ら好んで巷花路柳となりしものなり。伯は此娼婦に勸めて其生活を變じ、女料理人たらしめんとせり。されど娼婦の答は伯の意外とする所なりき。彼女は言ひぬ。『料理人とや、妾は麵包を燒くこと能はず』と。彼女は勞働の神聖なるを解せざるが故に料理人を輕蔑し、寧ろ娼婦たることを以て善しとしたり。伯は又他の一娼婦を知れり。此娼婦は十三歳の其女をして自己の如き娼婦たらしめんとせり。母なる娼婦は其半生の精力を注ぎて其女を娼婦たるべく敎養し、斯くて自ら自己の爲し得べき最善を爲したるものなりと信じ居たりき。伯は此狀態を見て女性の思想の根柢に横たはれる誤謬を發見したり。伯謂へらく此の如き謬想は獨り無智なる婦人の有するものに非ず、婦人は男子に養はれ、男子に衣せられ、男子に注意せられ、而して男子の淫情を滿足すべきものなりと云ふは貴婦人も娼婦と共に有する所なりと。伯は婦人を社會の桎梏より解脫せしむるの道は此の如き謬想を去りて神聖なる勞働に從事せしむるに在り、勞働の神聖なるを解せざる貴婦人は高貴なる娼婦に過ぎずとせり。之を要するに伯は勞働の權威の爲に極力其神聖を唱へたるものなり。伯に依りて勞働者たる階級は自ら振ひ、自ら壯としたり。伯の人望が一代を壓したる最も大なる秘密は實に此に存す。

露國及びトルストイ伯（八）

我等は重ねて言はんと欲す。伯は大なる小兒なり。一物を注視して他物を忘れ、一理を固執して萬理を等閑にす。伯は極端なり。偏理なり。極めて偏頗なる獨斷家なり。たとへば伯がダルウヰンの進化論を理會する能はず、露西亞の一科學者は進化論を破壞して其根本的誤

謬を指摘し得たりと信じ居たるが如き科學の權威を侮り、總ての科學者を侮り、彼等は耶蘇時代の所謂學者に比しき硬心、冷情の學究なりと稱したるが如きは正に伯の獨斷家たるを證し得て餘あるものなりと謂ふべし。果して然らば伯が

人間幸福の第一要件は人間と自然を繫ぐべき鎖を破らざるに在り。是れ人が上なる天を樂み、田園の純粹なる空氣及び生活を樂まんが爲なり。故に土地は國有ならざるべからず、否其集中的傾向を避くるが爲に村落の共有とせざるべからず。

と主張し、總ての租稅を非理の掠奪なりと斷じたるが如き、亦唯だ楯の半面を見たる極端論に過ぎざるのみ。唯だ其れ極端なり、獨斷なり、非常識なり、自ら强く感じ、自ら强く動きたるものなり。是れ亦伯の著書が讀者を動かし、多くの弟子を生じたる秘密の一なり。何となれば是れ最も露人の性癖に合するものなれば也。

イブセン論（一）

詩人は候禽時鳥なり。如何なる詩人も其時代と其氛圍氣を歌はざること莫し。英國詩人シーレーは佛國革命に鼓動せられたる英國の思潮を謳歌したる詩人なり。彼は專制に抗して一身を犧牲にし、此犧牲に依りて自由の美果を人間に齎らし來りたる英雄を畫けり。彼は一たびは佛國革命を以て人間の完全なる理想の具體的に發現したるものなりとせり。されど乳と密との流るゝが如き樂しき國なりと思ひたる佛國革命は其實沙漠の如く荒れたる繪畫を彼の眼前に供したるに過ぎざりき。彼の人間を理想化せんとする希望は之が爲めに一たびは冷かならんとせり。彼は之を悲めり。彼の愛着したる理想が地

上に於て寒枯せんとすることを悲めり。而も彼は全く絶望し終らざりき。彼は猶ほ專制を呵責して自由の爲に長虹の氣を吐きて休することを知らざりき。是れ彼が遂に佛國革命の候禽時鳥たりし所以なり。此意義に於てゾーラも亦第十九世紀の候禽時鳥なりき。彼は實驗哲學の最も盛んなる佛國に育ち、其科學全能の氣運に鞭ちて人生の實驗に着手せり。彼は藝術界に於ける總ての約束及び主義より解脫し、先人及び時人の定めたる總ての繩墨を破壞し、科學と感覺の指導の外は何物にも賴らず、直ちに赤裸々なる人生其のものを寫し來らんとしたり。彼は此の如くにして時代の精神を文藝に注入したり。されど彼は之と同時に藝術家の見たる世界は到底藝術家其人の個性の影たるに過ぎざることをも認めざる能はざりき。彼は言ひぬ、所謂寫實小說とは一個の性情(則ち作家の性情)を通じて見たる自然の一角なりと。限りなき自然は何ぞ人間の見盡し知り盡し得る所ならんや。人間の知り得る所は唯だ自己の心に映じたる自然の一角のみ。是れ彼が正直なる告白なりき。而して此告白も亦近世的精神の發現として見るべきものたるや勿論なり。且彼は共和主義の戰士にして始終平民の味方たりしのみならず、晩年に至りて人口播殖及び勞動の福音を說き深く意を社會問題に致したり。詩人何ぞ時務に關せざらん。文藝何ぞ人事と交涉なきものならんや。我等がカーライルを論じ、トルストイを論じ、此處にイブセンを論ぜんとするもの、亦唯彼等が時代の空氣を代表する候禽時鳥たりしが爲のみ。

イブセン論（二）

イブセンは諸威の作劇家なり。彼は同國フラスベルク州の首都スキ

エン市に於て門地あるものゝ家庭に生れたり。されど彼の父は彼の少年時代に於て破産し、其家は市の郊外に退きしかば彼の生活狀態は大に變じたり。斯くて彼は青年時代に於て同國キリスチアンサンド州の東北部に在る人口八百の一小邑グリムスタンの一藥舗に寄寓し、此に五年間醫師たるべき修業をなしたり。諸威に於ける當時の藥舗は夕陽既に地平に沒して燈火を點するに至れば閑人、若くは懶人の集まり來りて其日の出來事を討論する一種の倶樂部なりしかば彼は此に活きたる人事を學び、樣々なる人間の標本を學ぶ事を得たり。既にして運命は彼を其豫期する如く醫師たらしめずして劇の作者たらしめたり。されど藥舗に於ける五年の青年時代を經過したることは劇の作者たる彼に取りては決して無益の業に非りき。何となれば彼は此間に於て書籍よりも多く人間を讀みたればなり。イブセン嘗て自ら其作物が自己の經驗を基礎とするものなることを論じて曰く

余の畫きたるものは必ず材を余の生活中より得來りしものに取る。たとへ余は實地に之を行ひたるに非るも、余が作中の出來事は余の經驗に一致せざること無し。

と。彼は此意義に於て寫眞派なり。彼は佛國の小說界に於てゾーラがロマンチック派の專權に抗して起ちたるが如く、諸威の劇の世界に於てロマンチック派の專權に抗して起てり。彼の著作の中には海もなく、森もなく、田園の香氣もなし。彼は自然の美を以て其舞臺の背景を粉飾せざりき。されど彼は之と共に深き注意と精細なる觀察を以て人生を畫きたり。彼の畫きし所は如何なる場合に於ても戲畫に非ず、眞の畫なり。彼は之が爲に時として餘り深刻に人生の暗黑面を畫きたるものとして批評家の攻擊を蒙れり。彼等は謂ひぬ、イブセンは

藝術家の題目とす可らざる不道德の事實を露骨に畫きたりと。されど是れ藝術の何ものたるを知らざるものの言のみ。ゲーテ曰はずや、詩人にして若し善く其材を用ふるの道を解せば如何なる事實も詩的ならざること無しと。無遠慮なる事實の描寫、何ぞ必しも文學の品位に關するものならんや。水滸の姦通を畫くこと二回に及び、近松の姦通を材とすること三回に及ぶ。されど何人も之を見て其文學的價値を疑ふものなし。何となれば大なる天才は善く其材を化して詩的ならしむるの術を解すればなり。且夫れ人生の創痍は唯だ應さに精確なる外科的の穿鑿に依りて其病根を明知すべきのみ。之を掩ひ之を燻べ、外觀の無病を粧ふが如きは無智なるもの、業なり。好ましからざる、若くは嫌惡すべき事實なりとも苟も人生を描寫せんとするものは絶待的に其事實たるを認識せざるべからず。而して此事實を描き來りて而も猶ほ看者の嫌惡を買はざるは則ち藝術家たる價値の存する所なり。イブセンの意蓋し此の如し。是れ其恐るゝ所憚る所なくして人間の描寫に努めたる所以のみ。

イブセン論（三）

イブセンは自ら看棚より人生を眺むる傍觀者を以て任じたりき。トルストイの如く自己の哲學を以て人生を救はんとする聖者、若くは預言者とするは彼の自ら期する所には非りき。彼は自己の位置を語りて言ひぬ。予は社會の病に向て醫療を加へんとする詩人に非ず、予は唯だ社會の病を診斷するもののみと。されど彼は遂に傍觀者にして已むこと能はざりき。彼は一種の理想を懷けり。そは彼が其作物の始終を通じて好んで運命と戰ひし强き男性及び强き女性を畫きたる

に依りて知らる。試に安政五年(一八五八年)を以て彼の著はしたるヘルゲランドの勇者を見よ。其女主人公たるヨルジスは意地強くして感情深く、その鬱勃たる意氣は境遇の壓迫に對して遂に抑ふべからざるものあり、往々にして愁歎の火山的破裂となりて現はれしに非ずや。彼女の父は敵の爲に殺されたり。彼女が戰勝者の家に連れ行かれたるは猶ほ少女たりし時なりき。彼女はかくして敵の家に養はるゝ寂寞の情を自ら慰めんとして男子の如く身體を練磨せり。斯くて彼女は劇しき武藝の習練の中に一時の滿足を發見せり。既にして溫和にして尊敬すべき勇者シガルヅは意志薄弱なる其友グンナルと共に彼女に會せり。而して二人共に彼女を戀したり。彼女は二人の戀に對して直ちに胸中の祕を顯はさゞりしかども、心窃にシガルヅに許したり。而して二人に約して云ひぬ。妾は卿等の中に於て最も大なる武藝を顯はしたるものに此身を委せんと欲すと。彼女はシガルヅこそ其選に中るべきものなりと期したりき。されどシガルヅは詭計によりて功をグンナルに爲さしめたりしかば彼女は不本意ながら其好まざる所に身を委せざること能はざりき。而して之と同時にシガルヅは穩和なるダクニーを妻としたり。彼女の薄命、斯の如し。後に至りて彼女がシガルヅの實は彼女を戀ひしつゝありしを知りし時、彼女の胸中に於ける煩悶は無限なりき。彼女は此上は甲冑を着けてシガルヅの行かんとする世界の何處にも行かんと欲すとさへ叫びたれども、此勇ましく、而も悲しき決心は實行を見ずして已みたりき。是れイブセンが境遇の壓力に反抗せんとしたる強き女性を畫きしものなり。されどイブセンの畫きたる強き意思の最も理想的なる代表者は慶應二年(一八六六年)を以て公にせられたる戲曲ブランドの主人公牧師ブ

ランドに如くはなし。

彼は陰鬱なる小さき北方の谷地の牧師となれり。此谷地は諸山と諸氷河との間に在りて日光の透ること稀なる所なり。彼は其妻アグネスと共に此に落付きたり。彼女は愛と獻身の化身なりき。一兒は二人の間に生れたり。されど太陽に見離されたる此谷地は小兒の發育に適せざりしが故に此兒は間もなく死にたりき。

或るクリスマスの夕は正に是れ死にたる小兒の最初の一周忌なりき。此日は吹雪の劇しき日なりしが一個の乞丐女ありて其小兒と共にブランドの戸に立ちたり。彼は此愍れむべき母子に死にし其子の遺物たる衣を與ふべきことを其最愛者の記念物として容易に手離すことを欲せざりしアグネスに說き勸めたり。間もなくアグネスも亦死ねり。

既にしてブランドの牧する敎會の信者はブランドの嚴格なる性格を以て單刀直入直ちに理想を實現せんと欲する決心と相容れずして彼を逐へり。彼は其敎會員の爲に石を投げられて負傷し、山中に彷徨して道路を求めたりしが岩石の間に於て狂氣したる少女に逢へり。此狂女は彼を荊棘を冠したる基督なりと誤認したりき。斯くて彼は雪崩に壓せられ、其破れたる理想を抱きて空しく他界の人となりぬ。

是れ此戲曲の梗概なり。彼はブランドに於て宗敎的の義務を果たす爲には人情を犧牲にし、親子、夫婦、朋友の親しき關係をも破碎することを辭せざる强き意思の人を畫けり。彼はブランドに於て堅固なる意思を以て一定の理想に向て進み、遂に理想の犧牲となることを辭せざる人物を畫けり。人若し理想を有せば全く之に服從せよ、否なれば寧

ろ之を放擲せよ、半ば附き半ば離るゝ如く微溫的なる擧動は人間の品位を辱むるものなりとは蓋しブランドの覺悟なりしが如し。詩人は其作物に於て自己の性格を表はし時としては自己の主張を現はす。我等はイブセンが好んで强き意思を畫きたるを以て彼が民政の信者に非ず、合議政治の信者に非ることを豫想す。何となれば一個人の意思を以て社會の支柱とせんとする彼の傾向は到底集合主義、民衆主義と歩趨を同くする能はざるべければなり。

イブセン論（四）

イブセンは强き意思を以て一定の理想を行はんとする人物を以て社會の支柱なりと信じたるが故に自己中心主義にして、變心し易く何事に對しても微溫なる諸威の公衆に對して反感を懷かざる能はざりき。彼が慶應三年（一八六七年）を以て世に公にしたる戲曲ピール、ギント」の一篇は其主人公ピールの性格を以て反語的に諸威人の弱點を諷刺したるものなり。試に下の筋書を讀め。彼が自ら言ひたるが如くピールは實に彼の好まざる諸威人の弱點と過失との權化なるに非ずや。

ピール、ギントは空想家なり。彼は何ものを想像とし、何ものを事實とすべき乎を區別し能はざる世界に住むものなり。彼は巨大なる慾望を有する自己中心家なり。されど彼は之と同時に善く俗世に處するの智慧を有したり。

彼は亞米利加に往けり。而して彼所に於て大なる財産を造りたれども、後に至りて遽かに之を失へり。彼が財産を造りしは奴隷を輸入し、且支那に偶像を輸出したるに依れり。彼は此商賣を爲すことに依りて生ずる良心を和げんが爲めに宣教師に聖書とラム酒とを

供給する他の商賣を始めたり。而して是にも相應の利益を得たり。彼は垂死の寢室に横はれたる母を訪へり。小兒の時と同じ調子を以て昔の神話を母に語れり。而して彼女は其神話の如く天門に入ることを許されしものなりと想像したり。

既にしてピールはカイロの顚狂院に入れり。此處にて彼は自己が處世の祕訣とする『他人の行にも說にも頓著せず、驀地に自己の滿足に向て突進するは自己を案內すべき好個の指針なり』との原則が遺憾なく行はれたりと妄想せり。彼は此處に帝として喝采せられ、藁の花冠を以て冠せられたり。斯くして權力を得んとする彼の慾望は滿たされたり。

最後に彼は白髮の老人として故鄕に還れり。少女たりし時彼の爲に棄てられたる貞女ソルヴェイグは熱心に彼を歡迎せり。彼女は今や老いたり。されど猶ほ其無情なる情人が失ひたる愛の王國を以て彼を待ちつゝありき。斯くてソルヴェイグは其情人の爲に其死の床を搖りて死の歌を歌ひたり。

是れ彼が諸威人に向て汝の薄志弱行、志大才疎、自利に急にして主義に緩き影像は實に此の如しと云ひしもののみ。斯くて一年を隔てゝ彼は『青年同盟』と題する喜劇を著はせり。是れ彼が散文を以て劇を書きたる始なりき。

此戲曲は政治的喜劇なり。半ば民主的なる政治家ステンスガルドなる一人の事を記す。彼は其本質に於て俗にして平凡なる品性の人物なり。彼の希望する所は政治的成功を得るに在り。彼は短見者流なり。自惚れの人物なり。人に接し人を御する實際上の鍛錬に於て絕待的に缺乏したるものなり。彼は變心し易き男兒なり。

彼の變心せざることは唯だ青年同盟を中核として堅固なる投票團體を造らんと欲するに在り。彼は雄辯家なり。彼の辯は有力にして其語句は豐富なりき。彼は愉快なる人物にして其開放的なるは小兒に近かりき。彼の人と爲りは唯だ此の如くなりしのみ。彼は常に輕侮の雲の中に坐しき。されど彼は敗北せざりき。彼が國家の重職に上り得べきことは讀者に暗示せらる。

イブセンの意は是に依りて諸威の政界を解剖せんとするに在り。政黨と稱する民衆は各一個のステンスガルドを首領としたるものに過ぎずとせば此政黨を基礎として造り上げたる政府が國利民福に對して滿足なる結果を生ずべきものに非るや勿論なり。されど是れ諸威政界の實狀なり。獨り諸威のみならず、歐洲に於ける政界の裸體的現狀は總て斯の如し。彼は此喜劇に依りて具體的に其眞相を暴露し、社會は黨派的政治よりも更に根本的なる他のものを要することを暗示したり。

イブセン論（五）

既にして彼は明治三年（一八七〇年）に於て普佛戰爭の起るを見たり。同四年（一八七一年）に於て純乎たる民政の成立とパリの自治的獨立とを目的としたるパリ共產黨の失敗を見たり。神學の變動漸く盛んにして耶蘇教は其根柢より動搖し、高等批評派の全勝を占めたるを見たり。彼の心は此の如き思想界の大波瀾に逢ふて益す其獨自一己を發揮し來れり。試に彼の自ら語る所を聞け。明治三年（一八七〇年）に於て彼は言ひぬ。

來らんとする時に於ては我々の今日懷抱する總ての概念は必ず泥

土に落つべきなり。今や則ち其時に近づきたり。我々の今日まで其上に立ちて生活しつゝある總ての概念は前世紀の革命が人類に與へたる饗宴の殘物なり。而して我々は此殘物を幾度も、幾度も、恰も牛の一たび胃中に入りたるものを再び咀嚼するが如く咀嚼したり。今や我々の理想は新しき實質と新しき解釋とを要す。自由、平等、友愛は今日に在りては祝福されたる斷頭臺の日に於けると同じものに非ず。されど政治家は之を理會せず。是れ予の彼等を惡む所以なり。彼等は政治上に於て獨り部分的の革命、則ち外面の革命を欲するのみ。かゝる革命は其實現代を改革するに於て何の效あらん。今日に於て有益なる革命は唯だ一なり。則ち人民の心に革命を與ふること是れなり。

同じ年に於て彼がジー、ブランデスに與へし書は、實に下の如きものあり。

國家なるものは終に消へ去るべし、且消へ去らざるべからず。國家なるものを地上より去らしむべき革命は予を其側に發見すべきものなり。國家てふ理想を顚覆せよ。國家てふ理想に代ふるに人々の自發的に出づる行動を以てせよ。而して人間を一致に赴かしむべきものは獨り精神的關係のみにして此外に人と人との間を結ぶべきものなしてふ理想は卿をして自由を得せしむべし。此自由こそ之を享受する價値あるものなり。

彼の心は舊き圈套より脱して新しき空氣に活きんとせり。彼は國民的理想の古き秩序は歐洲に於ては既に其最後に達したるが如く感じ個人主義の新しき紀元の開かれたるを見たり。彼はパリの共産黨に對して憤慨せり。同時に之に對する保守的反動にも失望せり。彼は

謂へり。『民主主義に依りて氣隨に定りなき方角に動く大なる盲目の群衆より眞正なる社會改革の出で來るべしと豫期する能はざるは固よりなり、今や古き社會は病んで將さに死なんとす、將來に於ける唯一の希望は唯だ個人の人格に在り、偉人なる男女の出で來ることに依りてのみ社會を新しきものとすることを得べし』と。彼の强き男、强き女を理想としたる心の傾向は此に至りて成熟して一個の個人主義となれり。論者或は言ふ彼の個人主義は決して民政に反對するものに非ず、彼は唯だ一個人の合理なる自由を極度まで廣ぐることに依りて偉大なる男女を造り、此偉大なる男女に依りて眞實なる民政を實現せんと欲するもののみと。されど是は强て彼の個人主義と民政主義とを調和せんと欲するもののみ。我等の見る所に依れば彼は如何なる點に於ても民政主義の信者に非ず。何となれば彼は民衆に對して常に不信と輕侮との念を抱きしものなればなり。試に明治十八年(一八八五年)に彼がヅロンゼイムに於て勞働者の倶樂部に演說したる左の言を聽け。

單純なる民主主義は社會問題を解決する能はず。我々は貴族主義の要素を我々の生活を導き入れざるべからず。予が此所に貴族主義と云ふものは勿論、家門の、若くは財囊の貴族主義を意味するものに非ず。予は又知識の貴族主義を意味せず。予は品性の意志の心の貴族主義を意味す。唯だ此貴族主義のみが我々を自由にすることを得べし。

分明に是れ個人主義なるに非ずや。彼は此點に於てカーライルと思想の傾向を同くするものなり。同時にニッチエの超人主義も亦國家全能主義、民政主義、集合主義に反抗して起ちたる點に於て彼と同じ思

想の傾向を有するものなるを見る。

イブセン論（六）

我等の學ぶ所に依れば近代の歐洲は實に二の主義の相戰ふ所なり。一は則ち生活の必要より來りたる集合主義なり。近世の産業的生活は一個人をして大なる機關の一齒輪に過ぎざらしめたり。産業社會に於て主として働くものは機械にして人は唯だ機械の助手にして物品を産するに過ぎざる世は來れり。此産業的革命は所有社會を變化せり。政府の職務は增大せり。國家は個人の事業を併呑し、個人の創思と活動とは次第に國家の事業に沒入し人間は一個の機械と化し了らんとす。個人の靈を救濟せんとする宗教すらも今や組織と、禮儀と、機械の巨大と復雜とを以て能事とし個人の人格を閑却せんとするの傾向を生じたり。而して是れ實に民政主義の産物たるに外ならず。何となれば民政主義は群衆の力を信じて個人は唯だ群衆の爲に一個の機關たるに過ぎずとするものなればなり。伊太利のマジニーは民政主義の驍將なりき。彼は言ひぬ。

一個人は人類全體の爲にする大なる仕事場に働く工人なり。彼は其仕事を爲し終へたる後亡ぶべし。されど其結果は人類全體を益すべきものなり。

○

ルイ第十六世が佛國を逃れ得たりとて、佛國の歷史は反對の方角に流るゝものに非ず。世界の運命は數人の手に依りて變じ得べきものに非ず。人生と世間とは賭博の戲の如く偶然の事態を生ずべきものに非ず。

○

世界には一個人より大にして且聖なるものあり。則ち人間總體是なり。此人間總體は集合體として活動し、常に學び、常に神に向て進むものなり。我等個人は唯だ其機械たるに過ぎず。

○

今日の問題は人體全體の結社を完全ならしむべき原則を發見するに在り。此結社の一員たる人間の活動すべき部分を定むるに在り。人類全體の爲の勞働に於て自己の負ひたる任務を遂行するを以て個人の義務とするに在り。斯くて各人は各其力を量るべし。人類全體の爲の勞働に於て彼の負擔すべきものが何の部分たるかを學ぶべし。

其言多しと雖も社會は全體なり、個人は部分なり、人は社會共同の努力に於て其一機械たるを以て滿足すべしと云ふに在るのみ。是れ民衆主義の理想にして同時に現代生産社會を統一する思想なり。されど此の如きは果して全く人心を滿足せしめ得べき主義なる乎。何ぞ其れ然らん。佛國革命以來、民主主義は數ば事實となりて顯はれんとせり。されど多くの場合に於て失敗せり。國家、若くは政治若くは宗教の大なる機關に依りて人間の狀態を改良せんとする集合主義は樣々の形となりて現はれたり。されど其結果は要するに外部より人間を壓迫せんとするものにして所謂『外圍は人格を造る』てふ原則をのみ株守するものなるが故に、到底個人の責任に對する感覺を鈍くし、人間の運命を以て重荷を負へる畜類に同じと感ぜしむるに過ぎざらんとす。是れ豈人類の本能が甘服し得べき教理ならんや。勿論集合主義の信者と雖も、其主義とする所に斯かる弱點あるを自覺せざるには非りし

かばマジニーの如きは教育に依りて此缺陷を補はんと欲したりき。彼は言ひき。

總ての政治問題の歸する所は教育なり。人類全體の努力の目的は人間の道德的進歩を鞭韃するに在り。伊太利の如く教育なく、出版物なく、政治的集會なく、檢閲官の爲に新聞記事の裁斷せられ、高貴なる僧侶の說教に依りて人民教育の總ての種類が非難せられ、王侯に依りて人民の讀むべき書に允可の印を捺せらるゝまでも何人も之を手にすること能はざる國に在りては、何ぞ人民の道德的、智識的狀態を改良することを得んや。

一方に民政主義、集合主義を唱道すると共に他方に人民教育を唱道するものは、我等の信ずる所に依れば識らず知らざるの間に於て多少の矛盾に陷れるものなり。何となれば教育は個人の業なり、個人を教育して一個の人才を作ることは則ち其半面に於て人才を基礎とする貴族主義を容認するものなればなり。されど我等をして議論を避けしめよ。我等は唯だ事實を語らざるべからず。民政主義、集合主義の缺陷に苦みたる歐洲の人心は他の一方に於て社會の爲に壓倒せられんとする個人の心に犯すべからざる威嚴あるを認めたり。而して個人を完全にし個人の心の機能をして活潑ならしむることに依りて根底より社會を改革せんと欲したり。カーライルの如きイブセンの如きは則ち此かる反動主義の代表者たるに外ならず。

イブセン論（七）

我等をしてイブセンに復らしめよ。彼は明治六年（一八七三年）を以て『帝及びガリラア人』と題する劇を著はしたり。是れ彼が信仰の動搖に

苦みたる時代の煩悶を異教者羅馬帝ジュリアンの事に託して語りたるものなり。

此劇は基督教の勃興に抗して世界を救はんとしたる羅馬帝ジュリアンの努力が不成功に終りたることを以て材とす。而してイブセンが同情を以て異教主義に對したるは作中に於て自ら掩ふべからざるものあり。

ジュリアン帝は青年時代より哲學者らしき生活を始め以て其死する迄に及びたり。帝の世は基督教が長大足を以て進歩し異教主義が日に衰亡に傾きつゝある時なりき。而して帝は基督教を好まざりき。

帝は基督教が人性は惡なりてふ教理を有したることと、人心を壓して其より解脫すること能はざらしむる一種の力を有したることに對して最も強き反感を抱けり。帝は曰く『卿は神人の力を有せざるが故に其教を理會する能はず。其教の所謂神人が世界に廣めたるものは教理以上のものなり。是は人間の常識を桎梏する魔力なり。余は信ず。一たび彼の手に落ちたるものは再び自由なることを得ざるべし。其教に誘はれたる我等は外國に移し植ゑられたる葡萄樹の如し。我等を本國に植かへすとも、我等は枯死すべく、新しき土地に在りとも我等は萎み終るべし』と。

斯くて帝は舊き教にも非ず、新しき教にも非る第三の宗教を造ることの可能なるを見たり。此宗教は一たび乖離したる自然と靈とを調和せんとするものにして、靈を通じて自然に還ること、全人類の爲に努力することを以て其歸趣とす。帝は自ら此新しき宗教の神聖なる代表者なりと想像せり。而して帝の友マキシムは遂に『第三の

王國は地上に現出すべし。人の靈は再び靈と自然の乖離せざりし昔に於て得たりしものを得るに至るべし』と豫言せり。

されど帝の高慢なりしと、帝の齡がその意思を弱からしめたるが故に失敗せり。帝は言ひき。『嗚呼ガリラヤ人よ。爾は勝ちたり』と。

イブセンが其國人の宗教たりし耶蘇新教を好まず、常に新教主義に對して攻擊の鋒を向けたりと云ふは必ずしも事實に非ざれども彼が基督教に對する時代の懷疑不信に關し決して眼を閉づること能はず、一種の神秘主義に依りて新しき安心を發見せんと欲したるは此劇之を證して餘あり。されど彼はトルストイの如き說教者に非ず。彼は死生の問題、人生の價値等に關してトルストイの如く一個の教義を樹てんとしたるものに非ず。宗教家の動靜に關しても彼の注意を集めたる點は其信ずる教義に非ずして寧ろ其活力なき、死にたる道德に在り。

そは此劇の著はされたる後四年、卽ち明治十年(一八七七年)を以て彼の作りたる『社會の柱』に見るも明かなり。

『社會の柱は諸威の社會生活』に於ける或る缺陷を暴露す。其材は小さき商工業の中心たる海港に於けるベルニック家と稱する一家族にしてイブセンは是に依りて市長、教師、牧師中の最も優秀なる人物を捉へ來りて之を紙上に活躍せしむ。凡そ此種の人物は世の認めて以て社會の柱とする所なるが故に彼は劇の名を斯く命じたり。されど彼が此種の人物を賞讃せんが爲に筆を着けたるに非るは勿論なり。彼は此劇に於て却て時人が社會及び家庭の生活に於て基礎として信ずる所の慣習的虛僞に對して巧妙なる反語を弄したり。たとへば此一篇に寫されたる宗教家にして學校教師たりしロールンドの人と爲りを見れば彼が世の所謂社會の柱たる人物に向て痛

快なる諷刺を弄し、彼等が其實、虚僞の一塊たるに過ぎざることを證せんとするの意は明かにして掩ふべからずと。されど彼は單に彼等を罵らんが爲に筆を着けたるには非ず。彼等の眞實なる弱點を描き來りて社會の反省を求めたるのみ。詩人たるイブセンは此點に於て決して假空の烏有先生を揑造したるには非ず。ロールンドは彼が諸威に於て毎日途上に邂逅し得る性格なりき。

イブセンの記す所に依ればロールンドは正直にして良心の强きものなり。されど彼は見るべき外面の模型の外、道德に於て何ものをも見ること能はず。彼は一定の禮法を固執し、禮法の最も薄き面被（ヴェール）と雖も之を透破して其奥に潜める眞の意義を捉むこと能はず。彼は新しき理想を理解すること能はず。自然の本能若くは寛大なる感情に同情する能はず。彼の努むる所は久しき習慣と爲りたるために最初の意義を失ひたる訓戒、若くは格言を株守し、此に對して宗教の權威を與へ、嚴肅なる態度を以て之を發言するに在り。而して此訓戒、若くは格言は彼が其形式の一點一劃をも損せずして支持せんと欲したる所なり。

禮儀と社會道德の總ての約束に對して拘々焉として必ず守りて失はざらんとすると共に、抗拒すべからざる人間の本能が勃發し來りし時、若くは人の自然の仁心が心の奥より湧き出でし時、逡巡、恐怖して其意義を解する能はざるは諸威に於ける所謂社會の柱たる人々の常態なり。彼等は唯だ何處に於ても傳說的道德の權威ある說明者たるに過ぎざるのみ。此種の人物を以て其支柱とする社會が根柢より改革を要するものたるは勿論なり。イブセンの反語を以て其國人を諷刺せんとするの意は卽ち斯の如し。

イブセン論（八）

イブセンは社會の現狀が不定不安の位置に在ることを感じ、古き慣習、古き制度を以て久しく維持し得べきものに非ずとし、婦人の狀態に關して殊に深き注意を拂ひたり。彼の見る所に依れば社會は既に生氣を失へり。其腐敗したる纖緯は必ず之を裁割して全く除き去ることを要す。されど世の所謂慣習、世の所謂禮法は社會の病に外科的療治を施す能はずして、唯だ之を蔽ひ、之を彌縫して以て日に其腐敗を甚しからしめんとす。是れ彼の堪へざる所なり。彼は是故に『社會の柱』を著はして、以て習慣と禮法とのみに拘泥するものゝ其實社會の支柱たる能力なきものなることを諷示せり。而して彼が此主義を婚姻の關係に應用し、諸威社會の婚姻なるものが一種の虛僞に過ぎざることを

喝破したるものを有名なる劇『人形の家』となす。是れ彼が明治十一年（一八七八年）を以て著はしたる所なり。

『人形の家』はイブセンの著作中、最も多く世評に上りたる所にして、日本に於ても所謂新しき教育を受けたる女性は殆ど其の名を知らざるものなし。

此曲中の女主人公たるノラは一官吏の女なり。ノラは所謂深窓の處女として習慣的道德の格言に依りて教育せられ、未だ嘗て實社會の風波に曝らされたることなし。處女たりしノラが嚴重なる習慣の繩墨に其身を縛せられし間に於て僅に眞實の人生に觸るゝを得たる場所は唯其下女部屋ありしのみ。

やがて彼女は母となれり。彼女の夫は彼女を彼女と世界との總ての接觸より堤防したり。彼はその事業若くは困難を其妻と分つこ

とを避けたり。彼は其妻の小兒らしき本能を愛護して力めて其部分のみを發育せしめんとしたり。彼は美術的趣好を有するものなりしが、その妻に對する彼の愛は恰かも美術品に對する嗜好の如くなりき。

ノラの動作は其教育と經驗とが生み出すべき自然の結果に相應したるものなりき。彼女は輕快に虛僞を語れり。彼女は其目的を達する爲には殆ど人妻として、不謹愼なる媚をすら呈せり。彼女の權利に對する思想は極めて幼稚なるものにして金の問題の起りしときに彼女はその父の名を思ひ出さゞりし程に無頓着なりき。されど之と同時にノラは其心に於てやさしく誠實なる婦人なりき。彼女は愛情を以て其行爲の基礎としたり。彼女の動機は常に善なりき。彼女は罪に就て自覺する所なかりき。

彼女は久しき間、自己の責任に關しては何の感覺もなき愛らしき小兒たりき。是れ其教育の結果なり。

されど、彼女も亦人なり。彼女の心の中には習慣、教育、約束の全く眠らすこと能はざる成女の本能ありて潛みたり。而して此本能は實世界の陽光が彼女の『人形の家』に透りし時に醒覺せり。而して彼女は世界の裁判なるものを學びたり。彼女の夫は今や其裁判の嚴格なる說明者として彼女に向つて立ちたり。

此瞬間の打擊と衝動とはノラをして自己が未だ嘗て眞の婚姻を做さゞりしものなることを覺らしめたり。彼女が既に婚姻したりと思ひしは眞の婚姻に非ずして其實、行路の人たるに過ぎざる他人と數年間同棲したるのみなることを覺れり。彼女の夫、既に眞の意義に於ける夫に非んば彼女は其小兒に對しても適當に母なりと云ひ

得べきものに非るなり。ノラは斯く信じたり。而して謂へり。『我等の婚姻が眞の婚姻となるまでは妾は夫と住む爲に歸り來らざるべし』と。斯くてノラは其家を捨て去れり。

イブセンは此劇を書きしが爲に物論を沸騰せしめたり。そは彼は此篇に於て婦人は男子の爲にのみ存するものに非ず、自己を沒して男子の犧牲となるを以て其能事とすべきものに非ず、婦人は男子に對立して其獨自一己を保ち自己に對する義務を知り自己の面目と責任とに對し明白なる理會を有せざるべからずと主張したればなり。彼は斯くして男女の關係に對する古き思想に新しき批評を加へたり。人形の家の占領者たるノラが人形の如く拘束せられたる生活の間に於て女性の成年期に達し、眞の戀、眞の生の衝動を感じ、虛僞なる禮儀、婚姻の繩墨を破り、眞實の意義に於て生活せんと欲したることに依りて將來の社會は斯の如き自由と眞理と個人主義の新しき女性を基礎として組織せらるべきを暗示せり。其紛々たる世論の是非を招きたるも餘儀なき次第なりと謂ふべし。

イブセン論（九）

されどイブセンの造りたる劇にして最も多く物論を招きたるは『人形の家』に非ず。それより三年後の明治十四年（一八八一年）を以て著はしたる『幽靈』と題するものなり。是れ實に人間の心と體とに潛伏せる生の力を最も明白露骨に畫きたるものなり。此劇の女主人公たるアルヴィング夫人は何事に關せず、如何なることありとも其夫に付き纏はんと決心し、此決心を實行したるものなり。此女性は精力あり、知識ある婦人にして、善く其領地を整理し、其亡夫の爲に惡聲を掩ひ、其死後の

名を芳ばしからしめんと努力して略ぼ成功し、暫らく世間の耳目を欺き、隣里鄕黨をして彼は生前に於て善き人なりきと信ぜしめたるものなり。斯くて此夫人は其亡夫の記念を圍むに人巧的の芳香を以てし、些か其心を慰むるを得たると同時に漸次に自己が敎育せられたる無意義なる古き道德の訓誡を擲ち、獨自一己を有する女性たる自身に就て思考せんとするに至れり。

恰も此時、夫人の子息オスワルドは其出生と同時に其心身に潛在したる病を發し、死の運命を抱きて家に歸れり。夫人に取りては此病みたる子息は此父の幽靈なるが如く見えたりき。

オスワルドは其病の爲に過度なる亂行を爲す能はざりき。されど彼は今や多量の酒を飲むものとなれり。彼は其半姉妹たる少女に戀したり。恰も同じ場所に於て其父が、其母に對して爲したる如くに。劇はオスワルドの發狂が其最初の徵候を著はしたるを以て終る。

此劇に『幽靈』の名を付したる所以はアルヴイング夫人が牧師マンドレスに語りたる語に明かなり。曰く。『妾は斯く考ふることの已むを得ざるを感ず。我等は總て幽靈なり。マンデルス牧師よ。我等の中に歩むものは獨り我等の父若くは母より遺傳したるもののみに非ず。枯死したる理想、及び生なき古き信仰は總て是なり。是れ皆な一の活力なきものなり。されど我等に付き纏ふことは遺傳に同じ。而して我等はその羈絆より解脫することは能はず。妾若し新聞紙を把りて之を讀めば其文字の行間にも此種の幽靈は出沒す。海の沙の多きが如く幽靈は國中に滿つ』と。

若し『人形の家』を以て婚姻の悲劇なりと云はゞ、『幽靈』は則ち遺傳の悲劇なり。生の力の抗拒すべからざる權威を以て人間の繩墨を破壞せん

とする事實を躬體的に告白し、此の如き力を隱くし、若くは壓せんとする努力の結果が空しきものたることを明白に語りたるものなり。イブセンは之が爲に詩人として取扱ふべからざる餘り悲慘なる事實を無遠慮に畫き來りたりとて公衆の嗔を買ひたり。されど彼は之が爲に自己の文壇に於ける新しき立場に直立して動かざりき。彼が明治十六年(一八八三年)を以て著はしたる『人民の敵』なる劇は則ち彼が個人主義の主張を明かにし、同時に所謂輿論の評價なるものゝ輕蔑すべき理由を語りたるものなり。

イブセン論（一〇）

イブセンは其少時より獨立獨歩の操を養ふべき境遇に置かれたり。彼は小兒たりし時より他の小兒と遊ばざりき。他の小兒輩が家の廣庭に於て飛躍しつゝありし時に彼は庖廚に接したる小徑に退きて自ら劃り何人の闖入をも許さゞりき。常に清醒の心を以て人事に對したる彼は何人にも動かされず、何人にも支配せられざる獨自一己を保有したりき。此性格は彼をして強き女、強き男を畫かしめたり。此性格は彼をして文壇の繩墨を破り、直ちに人生其物を寫さしめたり。此性格は其國人をして彼を呼ぶに鐵心の人を以てせしめたり。文士の作品は遂に其性格を反映せざることを得ず。此意義に於て『人民の敵』はイブセンの性格と其主義とを語りて餘あるものなり。

此劇は諸威の社會生活が有する缺陷を最も明白なる文學的製作に依りて裸體的ならしめたるものにして、其實質に於いては劇と云はんよりは寧ろイブセンの社會に對する抗戰的態度を明白ならしめたる小冊子と云ふべきものなり。

或る小さき町に一個の浴場ありき。此浴場は其町の繁昌を維持したる重もなる源因にして、その醫學上の主事は卽ち本篇の主人公醫師ストックマンなり。

ストックマンは此浴場の排水組織の惡しきが爲に水は不潔にして且有毒のものとなり、病者に危險なる結果を來たすべき恐あるに至りしことを發見し、此事實を明かにし、且其改良を計らざるべからずと信じたり。且彼は町の生命とも云ふべき浴場の缺典を指摘することは必ず町の人民に感謝せらるべきものなりと思へり。

是に於て乎、彼は町民を集會し、浴場の實況を述べ、此事實を公にして直ちに改良に從事すべしと述べたり。人民は嘲笑罵詈を以て彼を迎へたり。されど彼は悍然として屈せず撓まず其所論を盡したりき。

彼が人民に感謝せらるべしと豫期したるは誤解なりき。意外にも其浴場の缺陷を指摘せられたる人民は浴場の改良を計らず、却つて彼を以て町の繁昌の源因に惡聲を加ふるものなりとし、『人民の敵』として町より彼を逐ひ出せり。

イブセンの民政に對する不信は此編に於て最も鮮明に畫き出されたり。所謂民政とは何ぞや。之を要するに黨派政治に過ぎざるに非ずや。所謂黨派政治とは何ぞや。醫師ストックマンの口を假りてイブセンは黨派政治の何ものなる乎を語りたり。ストックマン曰く、『黨派は腸詰を造る機械の如し、總ての頭腦を粉碎して一の混合物となす』と。如何なる天才と雖も黨派政治の機械となれば直ちに其本領を失ひて一個の傀儡と化し去らざるを得ず。民政の名は美なりと雖も其實は無意義の盲動に過ぎずとはイブセンの深く信じたる所なり。斯くし

て彼は『人民の敵』なる一編に於て正直なるものゝ孤立と、輕侮すべき群衆とを對比し、少數者は時として正しきこともあり得べけれども多數は常に惡しきものなることを證したり。

イブセン論（一一）

イブセンは其後猶ほ多くの劇を世に出だせり。されど其五十五歳の著述たりし『人民の敵』は彼の文學的技巧も、彼の政治及び社會に對する見解も既に其成熟に達したる時の製作にして、其餘は卽ち昨日の殘花、今日開くものたるに過ぎざるを以て我等は暫らく此に批評の筆を擱かんと欲す。之を要するに彼は到底時代思潮を代表する候禽時鳥なり。我等は彼に於て強き個人主義を發見す。我等は彼に於て社會の權威を以て個人の本能を壓迫せんとする集合主義、民政主義に對する强烈なる反感を發見す。我等は彼に於て醒覺したる個人を出發點として社會を根本的に改造せんと欲する新しき要求の欝勃たるを見る。思ふに歐洲の生活と思想とは今や千山萬壑の荊門に赴くが如く新しき個人主義に向て進まんとするものゝ如し。グリーンの人格的完全を說き、自我實現を說き、シジイウイクの倫理學研究の基礎を一私人たる市民の心理的解剖に置き、ゼームス敎授の心と體との關係を顚倒し、悲むが故に叫ぶに非ず、叫ぶが故に悲むなり、怒るが故に打つに非ず、打つが故に怒るなりと唱へて重きを個人の意思に置き依つて以て倫理學を改造せんとしたるが如き、オイケンが近代文明の弊を指摘し、近代文明は自然を征伏せんとするに始まりて、今や自然に征服せらるるに終らんとす、我等は强き精神的生活に還りて再び自然を征伏せざるべからずと主張せるが如き、悉く是れイブセンと同じ思潮ならざる

は無し。歴史は同じ現象を反復す。集合主義乎、個人主義乎、世界の思潮は人を集めんとする求心力と人を散ぜんとする遠心力との二方面に分れて相對峙すること古今となく一なるが如し。

イブセン論（一一）

諸威は世界の田舍なり。文明世界の目を以て諸威を見ればたしかに北方の鄙なり。此に三種の人民ありて住す。純乎たる諸威人は美しき髪を有する碧眼の人種にして寡言沈默を常とし深沈にして奥行深き天性を有し、ラプランド人は褐色の眼を有し、想像に富み、神秘を愛す。フィンランド人に至りては元來日本人種と同じ模型の蒙古種にして勇悍にして精力あり、實際的にして空想に耽ることなし。諸威は實に此三人種の住む所なり。其民間には他の歐洲諸國に見ることを得ざる特殊の音樂あり。而して其自然を見れば誠に人をして神を驚かし魂を消せしむるに足る。見よ。其地には一年に唯だ一日の夜と一日の晝とのみある所あり。彼所の夏は卽ち長き一日の晝にして森樹と野草との芳香を以て山野を薫じたる暖かき晴天白日なり。而るに冬に至れば卽ち暗黑と恐怖の長夜に入り、變化限なき北光の輝きを見るのみ。或は霧の中に二個、三個、若くは四個の太陽の同時に並び出づるを見ることあり。數百萬の海鳥の天を蔽ふて翱翔する、數哩に廣がりたる魚群の北海を旅する、海より直ちに屹立する鉛垂線の崖、及び其脚下を圍りて咆哮する波瀾、悉く是れ異常の景なり、悉く是れ造化の偉大を以て人間を壓せんとするものなり。此間に生れたる諸威人が其性往々にして極端なり易く、時としては憂鬱し、時としては嬉樂し、其心の鎮靜を維持する能はざるは地と人と正に相應したるものなりと謂つ

べき歟。我イブセンは此の如き國に生れて現代の文明を批判したる詩人なり。我等は彼に於ても亦彼を圍みたる自然の反影を窺ひ得ざるに非ず。

ジョルジ、ベルナルド、ショー（一）

（或人の問に答ふ）

愛蘭人にして現代の智者と稱せられしジョルジ、ベルナルド、ショーの事を御尋に付き愚存申上試むべく候。ショーは或る批評家に依り現代社會の病所を解剖して之を青天白日の下に暴露したる大諷刺家にしてポルテール。リナラン。アナトール、フランセーなどに伍すべき天才なりとせらるゝ人物に御座候。又或る批評家に依り其作りたる劇は哲學講義の變形にして眞の劇に非ずと誹られたる人に候。但し小生は文學上に於けるショーの價値を說くべき素養なきものに候間此には此點に付ては何をも申上ず候。唯だショーが『フエビアンソサイテイ』と申す英國社會主義者の一人として大に活動したりし人なることを述べ、併せてショーの思想に就て少々陳述可致候。『フエビアンソサイテイ』と申すは通例社會主義者の中に加へらるゝものに候へども、社會主義者の中にては此黨は臨機應變黨にて醇乎たる社會主義に非ずとて惡口致すものも有之候。仔細は此黨は普通の社會主義者の樣に國家及び現在の秩序に對して根本的の破壞を試みず、却て今日の議會制度に從ひ、其規矩を守り、空理空論を棄て少しなりとも實地の上の改革を爲し遂げんとするものなる故に御座候。元來如何なる學說にても之を偏執し、眼前脚下の世態を顧みず、直ちに其理論通りの根本的改革を地上に起さんとするは無理の注文にして極めて危險なるこ

とに御座候。然るに獨逸人は不思議の人民にて兎角、一定の教理を立て此教理に執着し、氣短、性急に之を實現せんと試むる癖御座候。則ち近世科學的社會主義者の泰斗カールマークスの『資本論』の如きも獨逸の社會主義者は恰も法華行者の四個格言に執着する如く、之を信條として固執するの風あれども、英國人は然らず、教理の如きは左程に頓着せず、唯だ事實上に於て幾分なりとも社會の不公平を減ずるを得ば以て足れりとする風有之候。ショーは愛蘭人にして英國人には非れども此點に於て頗る英國人に似たる所ある樣に存候。則ちショーは嘗てヘンリー、ジョージの土地國有論の演說を聽聞して人事を論ずるには必ず經濟的の基礎に立たざるべからざるを知り、尋でマークスの資本論を讀み大に感動し、始めて社會主義者となり、社會主義者として運動を試むるに至りしかども間もなく資本論の誤謬を看破したりと稱し、危險なる革命思想を擲ち唯だ法律に順ひ、秩序を守り社會の改革を企圖することゝ相成申候。則ち理論を偏執せざるは英人の特質にてショーも此點に於ては愛蘭人ながら英人に近きものに御座候。日本にては社會主義と申せば何もかもマークス一派の理論を偏執し、現在の國家社會を敵視するものゝ樣に思ふものもあり、又社會主義者と自稱するものも、さる振舞多く候得共是は眼界の廣からぬ故と存候。ショーなどは左樣の革命思想を懷くものに非ず、唯だ個人主義に反對して集合主義を唱へ、此主義に基きたる政策を贊成し、市政の改革、市民の道德、社會の進步の爲に戰線の前面に立ちて奮鬪したるのみに御座候。

ジョルジ、ベルナルド、ショー（二）

次にショーの信仰に就て一言いたし可申候。ショーは文學者にして

哲學者に非ず候得共、其議論の根底には一種の哲理ありて潛み申候。是は現代文士の常態に御座候。現代に於ては文人は哲學者、若くは宗教家の位置に代り、直ちに一種の信條を立てゝ同胞を敎へんとするもの多く御座候。ショーも亦其例に漏れず候。ショーの說に從へば此宇宙の本體は生の力と云ふべき絕待無限の自覺なき意に御座候。而して此生の力は時間を通じて自己を自覺あるものたらしむべく、努力するものに御座候。進化と申すは則ち生の力が次第に高き形を取りて自己を現はす徑路に外ならず候。此生の力をショーは神とも名付け候。世界は此神が自己を表はしつゝあるものなれば世界は則ち神なりとはショーの結論に御座候。是まで說き來り候はばショーの信仰がショーペンハーエル。ハルトマンなどと流を同くする一種の凡神論にして印度思想、東洋思想に類似したるものたるは明かに候。近世歐洲の思想が何となく亞細亞的となり總て梵學に類似せるものと相成候は著しき現象に候ひてショーも亦其潮流を代表する一人に御座候。扨、ショーは此見地に立脚し、斯樣の次第なれば世界の背後には大なる目的あり、大なる意あり、世界の諸現象は此目的が成就し、此意が明覺となる爲に發展し來るものたるに外ならずと主張いたし候。ショーの說に依れば「生の力」は次第に自己を自覺あるものたらしむべく努力し、其結果として遂に人間を生むに至りたれども、人間を生むに至りて「生の力」が旣に其絕頂に達し、最後の到着點に行き着きたるには非ず。人間は唯だ「生の力」が自己を現はし來れる進化の一階段たるに過ぎず。「生の力」は猶ほ進んで息まず、人間よりも更に高大、精微なるものとして現はるゝに至るべし。たとへば超人、天使、天使長の如きは卽ち是なり。而して最後に

於て生の力は全能、全智の神として自己を表はすに至るべしと申候。但し人間は生の力が神として自己を表はさんとする最近の努力に外ならざれば人間は則ち神なりと云ふも可なりとは是亦ショーの主張に御座候。斯樣にショーは梵學に似たる凡神論を主張致し候故、個人の靈魂を其所謂「生の力」と分つことをせず、個人的に不朽の生命ありと云ふ耶蘇教徒の主張する永生の教理を信ぜざるものたるは勿論に候。

獨逸の社會主義者は哲學を輕んじ、宗教を侮り、人事は唯だ經濟上の關係に依りてのみ支配せらるゝものなりと立て候者多く御座候間、彼等は唯物的宿命論者なりとて攻擊する人も御坐候。さりながらショーは斯樣に一種の信仰に立脚いたし候。ショーが純粹の社會主義に偏執するものに非るは此一事にても相分かり申候。

ジョルジ、ベルナルド、ショー（三）

ショーの主張したる哲理の中にて世上の道學先生より叱られさうなるは其『生自身の爲めの生の追求』と申す語たるべく候。此語を和らげて申せば縱慾論に御坐候。即ち人の情慾は道學先生の說く如く卑陋にして不潔なるものに非ず、之を遂げ、之を滿たすを以て當然とすと立つるものに御坐候。ショーの說に依れば前文申上げ候世界の本躰たり淵源たる『生の力』は人間を生みたるものなれば人間が其身に具へたる『生の力』の刺擊する如く積極的に活動するは當然の事に候。此活動が自己否定に非ずして自己肯定、即ち自己主張たるべきは勿論に御坐候。漢學者流の語を藉りて此意を表はせば天の賦與したる情を遂ぐるが則ち天意を行ふものに外ならず候。是がショーの所謂『生自身の

爲の生の追求』に御坐候。則ち『活きんが爲に活くべし』と主張するものに外ならず候。ショーは其藝術に於て情を殺し、若くは情の發動を恥ぢて躊躇逡巡し、消極的の辯護に依りて情を無罪ならしめんとするものを賤み、却て積極的に情を遂ぐるを以て美しきことなりと信ずる人を歎美いたし候。則ち自己の性の示す所に從ひ、自己の信じたる正邪の理想を枉げず、其行ふ所は其理想より流れ出で、敢て外見、批評、典故、權威に向て挑戰するものに光榮を歸し候。直情徑行なるべし、情慾は必ず之を遂ぐべし、是れ自己主張なりと立て候其敎理は成程隨分危險なるものなりと申せば申すべく候得共、斯樣なる說は昔にも珍らしからぬものに御坐候。情慾を遂ぐると申せば何とやらん恐ろしき說法の樣に候得ども人の情慾には限量あるものに候。且たとへば自己は無限に其情慾の對境を廣めんとするも、他人の情慾ありて之を制するが故に、詰る所は情慾の自由に働き得べき區域は狹小のものに候。昔しも支那の戰國時代に宋子など申す人ありて、此種の論を唱へ、人の情慾は小量なるものなれば之を遂ぐる樣にするこそ宜しけれとて縱慾論を唱へ申候。フーリエルもショーに先ちて此論を唱へ候。何も珍らしからぬことに候。ショーも下の如く申候。

義務、犧牲、其他同種類の說敎に對し反感を懷く青年の女子ありて、意義の空虛なる辭令に過ぎざる古流の道德を棄て其本能の導く儘に身を處せんことを願はゞ、予は躊躇することなくして其女子に告ぐべし。卿は所有手段を盡くして卿の爲さんと欲する儘になせ。卿は如何なる程度まで惡しくなり得る乎を自ら試みよ。是は卿に取りては如何なる程度まで善くなり得る乎を試むると同じ經驗なるべし。

ジョルジ、ベルナルド、ショー

善も限量あり、惡も限量あり、自己の性に存せざる惡を爲さんとするの困難なるは自己の性に存せざる善を爲さんとするの困難なるに同じとはショーの見解に御座候。されればショーの縱情論も一見甚だ危險なるが如くなれども畢竟は新しき道德を敎ふるものに非ず、古き道德に新しき意義を加ふるものに外ならず候。ショーも此點を自覺いたし居り候ひしかば我等の主張する道德は日の下に於て新しきものに非ず、メーテルリングの言ひし如く、「アラビアン、ナイト」の小說に於て見出し得べき、『汝自らを知ることを學べ。而して之を知り得るまでは汝は働くこと勿れ。之を知りたらば汝は汝の總ての慾望と一致する所のものを做せ。但し汝は汝の隣人を害はぬ樣常に大に注意せよ』と申す一節に何の新しきものを加へんとするものに非ずと申候。萬民をして其慾望を遂げしむべし、各其所を得せしむべしとは古今の政治家の期する所に御座候。ショーの縱情論も詰る所は此樣のものに候。我等は總ての新說に就て十分研究すべき筈に候。さりながら新說なりとて餘り驚かぬが宜敷候。新說と申すは多くの場合に於ては古き說の燒直しに御座候。

ジョルジ、ベルナルド、ショー（四）

ショーは前文に申したる如く社會主義者と申す名はあれども、それは唯だ概括的の總稱にて畢竟は人道の戰士に御座候。ショーは愛蘭人たるに似合はず冷靜の態度を粧ふ人に候。ショーの作りたる戲曲に現はれし人物は動物的の情を缺き、强て感情を抑制し、或は全く感情を缺きたる人の樣に見ゆるが多く候。さればショーの畫きたる人物は血色なきものにて其情は動物的情と云はんよりは寧ろ植物的情と云

ふべきものなりとは或人の批評に御座候。さりながら是はショーの無情漢たりしが爲に非ず、其猛烈なる感情に強て灰をかけて自ら沈靜せんと試みたるものにて畢竟は感情の爲に感情を否定したるに外ならず候。其實ショーは多情多感の男子たる點に於て純乎として純なる愛蘭人に御座候。而して其社會組織の缺陷より生ずる不義を惡み、不正を憤る點に於てはショーは何ものも其情の焰を消す能はざる猛烈なる火の一塊に候。されば或批評家は社會の缺陷が生じたる悲慘の光景に對する憐愍の情が若し露西亞文學の底に横はれる動機ならば、社會的の不正不義に對する憤怒はショーを嚮導する原則なりと申候。何故にショーは社會の缺陷が生じたる不正不義に對して斯くの如く猛烈なる憤怒の情を有するに至りしかと尋ね候に、是は一にはショーの天性に基き、一にはショーの主義に基き候。左の數節を御熟讀候へかし。

人若し自己を以て自個選擇、進化論、若くは進歩、若くは清教主義、若くは「正義の爲に造られたる我等に非る『他の力』の車輪に附着したる一疋の蠅に過ぎずと思ふものあらば、其人は唯だ無用の人たるのみにあらず、又實に破壞的の人なり。されど宇宙に一定の目的ありと信じ、一身を以て此目的に同化し、此目的の遂行は則ち是れ自己を犧牲にするものに非ずして自己を實現するものなりと信ずるものあらば其人は有用にして且幸福なる人なり。たとへ其目的とする所は或は神の意と稱し、或は社會主義と稱し、或は仁義と稱するも、其名は必しも多く拘泥するの要なし、其人は友たることを以て他と結び得る人なり、或は之を聖靈の友と呼び、或は之を民政と呼び、或は之を人民の議會と呼び或は之を世界の同盟と呼ぶとも要するに共同

の目的の爲に勞働し、若し必要ならば共同の目的の爲に戰ふ眞の友なり。

ショーは自己の生命を以て全社會の生命に結び、全社會の爲に働き全社會の爲に戰ふは所謂犧牲にも非ず、所謂獻身にも非ず、所謂自己否定にも非ず、却て是れ積極的に自己を主張するものにして『生の力』の發展たるに外ならずとし、畢生の力を注ぎて全社會の爲にするは則ち人の特權なりと信ずるものに御座候。ショーの心の狀態は此點に於て頗る宋儒の仁を說くに似申候。宗儒は萬物を一體とし、身が苦痛を感ずる如く他人の苦痛を自己の苦痛なりと感ずるを以て仁の作用と致候。ショーの心は之に似たるものに候。ショーに在りては社會の疾は則ち他人の事に非ず、實はショー自身の病に候。是はショーの說に依れば一個人の生命は社會の生命と同一のものなるを以て社會が病に罹りたるは則ち一個人が病に罹りたるに外ならざるが故に候。ショーは獨り說に於て斯く信じたるのみならず、感情に於ても全く此通りに感じ居り候樣に見え申候。されば、ショー自身より云へば社會を救ふは則ち自己の靈を救ふべき唯一の方法に御座候。ショーが『予は死ぬるまで予の用ひ盡されんことを望む。何となれば予の事業が難儀なれば難儀なる程予は生活するもの(眞の意義に於て生活するものの義)なればなり』と言ひしは是が爲に候。則ち『生の力』は人間となりて現はるゝものなるが故に、此人間が其發展の爲に努力すべきは是れ則ち自己主張に外ならず。人生の困難は『生の力の』努力に外ならざるが故に厭ふべきに非ずと立て候がショーの見地に御座候。

ジョルジ、ベルナルド、ショー（五）

論じて此に至ればショーは社會の外形を改造することを以て其手段とする過激論者にはあらず候。ショーは人を内心より改造せんとするものに御座候。則ち外部よりは何等の力を加へず、人の意思の自由を重んじ、此自由意思の一致に依りて自ら社會を改革せんとするものに御座候。簡單に申候へば形を一にする前に先づ心を一にすべしと主張するものに御座候。此點宋儒の仁を說くと全く歸趨を同じくするものに御座候。此に最後にショーの人生觀を記して貴答を終り申すべく候。

余は生を喜ぶ。生は短時間の燭光に非ず。或る瞬間に於て余の手にするを得たる輝きたる松明なり。余は之を將來の世に手渡しする前に能ふ限り美しく燃さんことを欲す。

是は最も美しき思想の樣に存候。猶ほ近々貴意を得べく候。敬具。

生命哲學

宇宙何物ぞ人生何物ぞ、我等の此問題に苦しめることと一日に非ず。近頃少しく自ら解する所あるものゝ如し。因て其所見を述べ題して生命哲學と云ふ。其意は生命は本なり。智識は末なり。哲學宗教の極意は生命の存續に在りと云ふの意を述ぶるが爲めなり。其問答體を取りたるは解し易からんことを欲したればなり。旦勉めて哲學上の術語を避け普通の語を用ひたり。

(一)

問。西洋には哲學と申す學問あり。宇宙萬有の根源より說き明かす由。其學問の大略を知りたし。

答。是はむづかしき御問にて何分御挨拶に困ることながら和漢の學問にも類のあること故、それとくらべて御判斷なさるべく候。たとへ

ば老莊の學。宋儒の學。佛學などは是れ則ち和漢の哲學にて西洋哲學と同じやうなるものに候。但し西洋の哲學と和漢の哲學との相違は西洋にては先づ我々が見たるもの、考へたるものが、本來我々の外に實在するものなりや否やと云ふ所に眼を着け其所より議論を立て候へとも、和漢の思想家は此點を論題にしたるとは先づ無き樣に候。たとへば柳は綠花は紅と其儘疑はず。我物ならぬ外界に綠の柳あり、紅の花ありと立て候が和漢の學者の常に候へども、西洋にては其柳を綠と感じ、花を紅と感じ候も、つまりは我心がしか感じ候までにて我心を除けば柳は果して綠なるや否や花は果して紅なるや否や、否それのみにはあらず、本來柳とか花とか云ふものが實在し居るや否や、分らぬことなり、されば外界本來の面目は人間の知り得べきものに非ず人間の知り得べきものは唯我心に寫りたるものゝみなりと云ふことを立て申し候。是は禪家に萬物心造とやらん云ふに似たる申條に候。英國のヒユームと申す學者などが此論にては先鞭を着け候人にて所詮萬物が我心の外に實在すと信ずべき證據はなし、唯我心にしかありと感ずるまでなりとの趣を說き申候。ヒユームの說に從へは、たとへば世の人は因果の律と申すことを申し候て、原因あれば必ず結果ありと考へ斯く考ふるは先天的のことにて是は誰れも異論のならぬ極まりたることなりなど申候へども是も外界は必ず因果の律ありて行はるゝと信ずべき理由あるには非ず、唯風が吹けば雲が飛び花が咲けば實の生るを見るに慣れたる我心が、斯樣に我心に連續して物の寫りたる有樣に依りて因果の律が外界を支配すると獨きめにきめたるだけにて言はゞ心の癖なりと申候西洋にては此論ヒユームに始まりて追々同感のものも出來、カントと申す獨逸哲學者に至りて更に精しく相成候。

カントの論旨を物に譬へて申し候へば人間の心は恰も一の鑄型の如く其の心に寫れる萬物を一定の形に鑄るものに御座候。萬物には自ら法則あるべし或は無かるべしと雖も其の邊の事は人間の知り得るに非ず。人間は唯、我心に觸れたる萬物を心に固有する一定の鑄型所に入れて一定の形に鑄るものにて既に我心の領分に入りて一定の形に鑄られたる其ものは萬物本來の面目と同じものなりや、或は然らざるやは人間の解し得べき所に非ず。人間は唯蟹が横に這ふ如く蜂の美しき巣を作るが如く自分の心の鑄型を以て萬物を鑄るのみ。されば人間の知り得べきものは我心性の法則(卽ち我心に固有し我心に入り來れる萬物を鑄冶する一定の鑄型)にして萬物自身の法に非ずと申すがカント哲學の要領に御座候。斯樣に天地萬物の大道理を詮義する前に、先づ此大道理を會得すべき心の研究より取掛り候て人間の知り得べきものは萬物本來の面目に非ず、唯だ我心に映じたる形のみなりと云ふ所より立論致候は和漢には珍らしきこと西洋にても希臘羅馬時代には無きことにて先は近世の發明と相見え申候。

◎

但し萬物本來の面目は知り難し。知り得べきものは我心に寫りたる形のみと申したらば理窟はそれにても通るべく或はそれが眞の理窟なるやも知るべからず候へども、實際上人間は左樣の理窟にて滿足いたし候ものには無之候。人間の智惠はヒューム、カントの議論に楯突き可申ほどの議論を生み出さず候へども、人間の要求は森羅萬象日月星辰を實物と信ぜんと冀ふものに御座候。爾の見たるは鏡中の花なり、實の花に非ずと敎へられて夢幻の如き世の中に生活することは人間の堪へざる所に御座候。さればカントも理窟の上よりは萬物解す

べからず、知るべからずと立て候得共實行の上に於ては一轉語を下し有神論などを說き申候。但し之は次の問目に對し申上べくと存じ候間此には略し申候。さて萬物を實在と信じ候が人間の要求に候間、西洋に於ても我等は面を以て面に對する如く直に外界を會得するものなり、物の力、物の本體、因果律など申すは唯心中の幻影には非ず眞實疑ふべからざるものなりと申す說を立て候ひしハミルトン。(英國)。ヤコビ。(獨逸)。レイノルド(英國)などと云ふ人もなきに非ず候。さりながら道理より申し候へばカントの理窟は點を打つべき所なし。唯カントの樣に萬物の實在を疑ふは感情の許さざる所なる故、感情は必ず我等の見たる萬物は是れ實在なりと信ずるを要求するが故に斯く申すものに御座候。さればヤコビの如きは我等が面を以て面に對する如く萬物の實在を信ずる心の作用を以て必至の感情と申し候。畢竟左樣に信ぜねば心が濟まぬから左樣に信ずると申す迄に御座候。

(二)

問。西洋にては萬物の本體を如何に敎へ申候や。矢張宋學の樣に大極無極など申す議論御座候や。

答。前條申上候通カントの哲學に從へば物の本體は分らぬものに候。我等の知り得る所は物の本體に非ず、唯我心の鑄型に鑄りたる形式のみに候。たとへば我等若し一物が存在すと思ふときは之に伴ひて存在する空間と存在しつゝある時間とを思はざるを得ず候。然らば此空間と時間、俗に申し候へば時と處と申すものは我等を離れたる外界に存するものなりやと尋ぬるにカントはいや〳〵左樣のものが我等に離れて外界に存するや否やは人間には分るものでなし、物あれば其存在の場所ありとし其存在しつゝある時間ありとするは誰れの心も

左樣に考へざるを得ざる必然の事ながら、そは唯心が必ず左樣に考へると申す迄にて、つまりは心の鑄型より出でたるものなり、心の外に時間空間ありとは定むべからずと申し候。斯樣の次第なればカント流の議論に從へば萬物の本體は分らぬものと申すべく、カントの流を斟める人々を始め同樣の議論をする人は何れも萬物の本體は知るべからず、知るべきものは唯我心に映じたる影のみと申し候。バークレー。スペンサー(英國)フィヒテ(獨逸)など、つまりは同論に御座候。スペンサーの不可思議論とて一時東京などにて行はれ候ものは人々も御存じの事と存候。此流の議論に從へば萬物の本體は畢竟知るべからざるものに御座候。さりながら斯樣に知るべからず、解すべからざる森羅萬象の中に圍まれ居候てそれにて善しと滿足致し得べきや。人間は左樣の者に御座候や。それが成らぬとは前に申すレイノルド。ハミルトン。ヤコビなどの議論あるにても知れ申候。其上人間には智慧の外に生命と申すもの御座候。智慧にてはたとひ萬物解すべからずと云ひて滿足も致すべく候へども生命がそれにては承知致さず候。萬物解すべからず、人の生涯は闇夜の如きものなり。人は唯知るべからず。說くべからざる暗黑の中に煩悶して死ぬものなりとのみにては此生命が縮み申候。他の語を以て申せば此生命の堪へ得る所に非ず候。此處が考物に御座候。人間は物を知る爲めに生きて居り候ものに候や、若くは生きて居る爲めに物を知るを勉め候ものに候や。若し其主客を尋ね候はゞ生命が一番大切にて、智慧は生命に換へ難きものなりとの結論に達し申すべく候。されば智慧の上よりは萬物の本體は解すべからずと立て候ても、生命の爲めには左樣の疑惑だけにては滿足し難きとに相成候。それ故道理に於ては萬物の本體を解し

難しとしたる懷疑家のカントも人間として實行の上よりは別に道念の人心に存在することを認め、人間には我等は『然すべき筈』。『然すべからざる筈』と申す心あり候。我等が『然すべき筈』と申す感情を有し居候からは『我等は然し得る』に相違なく。『然し得る』ならば我等の意思には自由あり。我等の意思が自由なれば我等は『然すべき筈』のことを『然するの義務』ありと感ずるものなり。我等の心は斯く『爲さねばならぬ』こと、其の『爲さねばならぬ』ことを『爲すを得』若くは『爲さゞるを得る』ことを自ら知るものなれば從つて此宇宙は人間の行ふべき法則なく、宇宙を統一する道理なきに堪へざるものに御座候。我既に我が爲すべき義務あり爲さゞるべき責任あるを感ずるときは此感情を維持する必要より我等の行儀には一定の法則ありと感ぜざるを得ず候。是れ人生の實際上然らざるを得ざることに候。扨て斯樣に道德法の我心に存在することを考へ、此道德法の宇宙を統一するものなりと考ふる時は從つて神ありと考へざるを得ず、我は神と云ふものありと假定せずには宇宙を說明する能はずと申すがカント哲學の有神論に御座候。人に義務の念あり、人に義務の念あれば天地の間に道德の法なきを得ず。既に道德の法あれば神なしとするを得ずとはカントの立論にしてつまりは智慧の上よりは宇宙の本體は解すべからずと立てざるを得ざれども生命の要求より申せば神ありとせざるを得ずとの事に御座候。斯樣に智慧に於ては萬物を知るべからずとし、實行に於ては天地の間に神ありと信ずべしと說くはカント哲學の一脚は知に立ち、一脚は行(卽ち生命の要求)に立ちたる妙味の存する所に御座候。此段カントのみにはあらず。生命の要求より有神論に達したる人少からず候。たとへばカントよりは稍前に生れ候ジョン、ロック(英國)なども神の存在

は理屈にては說き難きとなれども人間には魂あり、此魂の如き有心のものを地上に生み出したる宇宙を無心なりとは考ふること能はずと申す所より神ありと立論致居候。カーライル(英國)と申すは哲學者にあらぬ文人に候得共思想深き人に御座候。此人は宇宙解すべからず。人生知るべからずなど疑惑致候は畢竟坐して考ふる爲めなり、若し起つて働かば我心自ら開けてかゝる疑惑は自ら散し去るとも申し、智慧は人に生命ある學問を與へず、生命ある學問は唯大人物の品性より流れ出づるものなりとも申し、敬畏の心を以て宇宙に對すれば神ありと感ぜざるを得ざれども、唯だ知識のみの働きにては萬物の空しきを知るに過ぎずとも申し、無神論は人間の性に反す、我等は神なき宇宙に住むに堪へずと申し、我等には良心あり、此良心は我等の光なり、此光は我等をして神に達せしめずんば已まずとも申し、我等は世を經ること多きが故に、森羅萬象に對して驚異の念を生ぜざれども、若し長く暗中に在りしものが忽ち太陽の光に接したらば其感果して如何、かゝる新鮮なる感情を以て宇宙に對するものは必ず驚畏、敬虔の念を起して宇宙に神ありと信ぜざるを得ざるべしとも申し、科學の名を以て來れる異端を排し、汝の面を以て直に宇宙に對せよ。斯くせば汝は宇宙の中に神あるを知らんとも申候。其思想の表し方は一端ならず候得共つまり知識にては宇宙の本體は解すべからず、知るべからざるものなれども、さりとて人生の要求卽ち生命は宇宙を一個の謎語として解すべからず。知るべからざる儘に放拋する能はず。必ず有神論に達せずんば已まずとの趣を述べ候ものにてカント哲學と行徑を同くするものなりと申すべく候。

萬物の本體知るを得べき乎。知り得べからざる乎。之を知り得べし

と云ふものも、其論旨は知り得べしとするに非れば人間の堪ゆる所に非ず、つまりは生命は宇宙の解すべく知るべきものたるを要す。故に宇宙は解すべく知るべきものならざるべからずと申すが西洋哲學の結論と存候。

（三）

問。西洋に於ては天地萬有は神より出でたりとも申し天地萬有は則ち神なりとも申す說あり。或は天地萬有は唯靈なき物質のみなりと申す說もあり。或は天地萬有は唯一個の心のみと申す樣なる說ありと承り候。其論旨の要點だけを御示し被下度候。

答。西洋の學問にても、東洋の學問にても萬物の根源、眼に見える世界の背後に在る眼に見えぬ神などゝ申すことの學問上明かに分るべき樣は無之候。此段は前にも申上候。唯人生の必要（卽ち生命）はそれが分からずと申しては濟まぬものに御座候間、さま〳〵の考を立てゝ宇宙の何ものたり、人間の何ものたるを說明いたし候、是れは說明し得べきが故に說明するには非らず說明せざるを得ざるを以つて說明するものに御座候。されば天地萬有は神より出でたりと申しても、或は天地萬有は則ち神なりと申しても、或は天地の間に唯無靈の物質あるのみと申しても、何れも我等の知識を滿足すべき證據ありて左樣の結論を得たるにては無く唯心の要求より何とか宇宙人生を說明し置かねば氣が濟まず活きて甲斐なきやうにも思はれ候間左樣の理屈を作りたる儀に御座候。然らば此等の說はたゞ心の必要上より生み出したる幻影にして何ものを眞とし何ものを僞とすべきやと申す何等の標準なきものに候やと云ふに決して然らず。たとへば我等は饑餓を感じ申候。さる時は何物をか胃腑を滿たすべきものを求め候。而して

食物を得て之を食ひ候時に我等は或は身體の安慰を感じ、或は不快にして嘔吐を催し候。是れ食物に良否あるが爲めに候。之と同じ道理にて心の要求卽ち生命は其食物卽ち宇宙の說明を求め候。而して其宇宙の說明、若し人心の要求に合せざる時は人心は猶ほ不安を感じて幾たびも其說明を換へ、遂に滿足するに至りて始めて已み申すべく候。此滿足こそ宇宙萬有の說明、則ち天地の根源を說明する哲學の是非を決すべき標準となるものに御座候。されば科學の知識は其眞僞を試驗に依りて決し、哲學の說明は其是非を人心の要求を滿足すると否とに依りて決するものなりとも可申候。但ししか言はゞ人心の要求は人に依り所に依りて異なるべし、夏日は涼を慕ひ、冬日は暖を求む。單に人心の要求が滿足せらるゝ程度を以つて宇宙人世の說明卽ち哲學の是非を決すと云はゞ其標準は人々皆異なるのみならず一人の人にても時と場所に依りて同じからざるべきが故につまりは捉へ所なき空論たるべきとの說もあるべけれども、西洋思想家の卓絕したる人人は決してしか思はず、總ての人心は一なり、人間の心は古今東西同一のものなり。人間が或る事を或る事の如くに考ふるは、しか考へざるを得ざる必然の運命にして、而も是れは萬人に普通なるものなりと立て申候。人心既に一なれば宇宙萬有の說明も歸一致すべき筈なるに今日まで色々の說ありて統一せざるは何故なりしと云ふに、畢竟何れの說も人心に一部の滿足を與へて、而も全體の滿足を與へざる故なりと可申候。先づ今まで世に現はれ候。宇宙萬有の說明卽ち哲學の大略を申し候へは

(一)有神論。是れは萬物皆神より出てたり、神は萬物に存在と其法律を與へたりと信ずるものに御座候。神は一なり、萬物の父なり、萬物

を統治するものなり、萬物の中に在り、萬物を通じて現はるゝものなりとはユニテリアンの敎師チャンニングの信仰に御座候。但し同じ神ありと立て候ても昔しは神は宇宙を作りたるのみにて宇宙の外に在り。宇宙の外に立ちて宇宙を動かすが則ち神なりとやうに信じたる者なきに非ず候へども唯今にては神は宇宙の内に在り、宇宙は神の内に在り。森羅萬象の活動するは卽ち神の靈、神の力のそれに通じて現はるゝものなりと申す樣に說くが多く候。斯く說けば萬物直ちに神なりと云ふと其間唯髮のみに候。

(二)凡神論。宇宙萬有は卽ち絕待の顯現なり。卽ち絕待なり。我等の心も絕對の顯現なり。則ち我等も亦絕待なりと云ふが凡神論の奧意に御座候。是は支那の老莊思想も同樣に候。西洋にては昔しはスピノザ此議論を唱へ、近時はヘーゲル(獨逸)最も名高きものに御座候。ヘーゲルは萬物の本體は最高至上の微妙なる有機體にして自ら開展すべき內部の必要に依りて開展し森羅萬象になりしものなりと說き色々六つかしき說明を付けたれども、つまりは萬物は一原より開展し來るものなりと立て候ひしスピノザの議論に一步を進め其開展し來る所以の原理までも說明せんと試みたるまでに御座候。此思想より申せば部分は卽ち全體なり、瞬間は則ち永遠なり、人は卽ち天なりとも申すべく候。西洋にては此思想近時大に進み候而スペンサーの不可思議論、ショッペンハウエルの宇宙意論など申すも出で申候。萬物は絕待の一原より出て、恰も源泉混々として晝夜に休まざる如く森羅萬象を顯現するに至りたりと申すが總ての凡神論の歸着點に御座候へども其萬物の大源たる絕待其物は如何なるものやと云ふに凡神論者も其見る所は同じからず。スピノ

ザは萬有の大源を神と稱し、此神は絶對無限なるがゆゑに、智惠、自由、主宰等の如き性格を付する能はず何となれば斯く性格を付するは神の性を有限にするものなればなりと云ひ、ヘーゲルは萬物の大源たる絶對を稱するに實體の語を以てし、實體を智慧若くは道理と稱し、スペンサーはスピノザの神、ヘーゲルの實體に代ふるに不可思議的の名を以てし、萬物の大源は知るべからず、議すべからざる的のものなりとしたり。就中最も不思議なるはショッペシ、ハウエル。ハルトマン(共に獨逸)の說にして萬物の大源を以て意としたること是なり。此に意と申すは人意と申す如き有心の意には非らず、萬物の大源は意なり、此意は有心のものに非らず、無心の力なり、此無心の力たる意が萬物の大源なりと申すがショッペンハウエルの說に御座候。我等は之を名けて宇宙意の哲學と申し候。そは單に意の哲學と云ふよりも宇宙意の哲學と云ふ方が善く其思想を說明し得るものなりと存ずればなり。さて此無心の力卽ちショッペンハウエルの所謂「意」我等の假りに名づけたる「宇宙意」が如何に發展して森羅萬象となるやと申すに、ショッペンハウエルの說に從へば三段の順序に現はれ申候。一は卽ち無機物界に現はれ申候。引力、磁力の如きもの是なり。二は則ち植物界に現はれ申候。植物の生長發達の力是なり。三は則ち動物界に現はれ申候。下等動物の生活より一轉して有情の物となり、更に進んで高尙なる人間の腦髓となりて現はれ、此に始めて有心のものを生ずと申候。其說方は異り候へども畢竟凡神論の範圍を脫せざるものと可申候。ハルトマンが宇宙の大源を說き候も大意はショッペンハウエルと異ならずしてやはり萬有の大源は無心の意なり。卽ち我等の所謂宇宙意なり。此無心の

意(卽ち絶待)は宇宙の魂なり。見るべからず、又自ら見ることなき萬物の匠師なり。森羅萬象は形を此無心の意に與へられ、此無心の意に依りて存するものなり。此無心の意は力を有し、理想を有するが故に其發展は機械的なると共に合理的なり。其動くや休むことなく、疲るゝことなく過つことなしと申候。是れ亦萬有は絶待の一源より開展し來ることを敎ふるものにて其絶待を見ること一種の見解ありて他の學者と同じからざれども、つまりは凡神論と申すべきものに候。米國の文人エメルソンと申すが道理は人間の作りたるものに非ず、人間は却て道理に作られしものなり、道理は靈なり、靈は萬物を創造するものなり、人間の父なりと申し候も、やはり凡神論に御座候。

(三)唯心論　前文カント哲學の事を申述べし時、理窟より申せば外界に存在するものゝ本體は我等には知るべからず解すべからざるものなり。我等の知り得る所は唯我心のみと云ふことになる趣を述べ申候。是に於て唯心論と申すが起り申候。卽ち天地の間に其存在を證すべきものは唯此心あるのみ。此有限の心の存在するに依りて更に此心を主宰する無限の心ありと論證し得べきのみ。心外の何物も其の實在を認むべからず、宇宙は一大心海に過ぎずとは(バークレー(英國)の說に御座候。フイヒテ(獨逸)が客觀は主觀の作る所なりと申候も並の詞にて申せば萬物は心の作る所なり、心の外に萬物は無しと申すに外ならず候。フイヒテは此趣を說明する爲めに我と申すことを立て申候。我と申すは先は心と申すが如きものに候。フイヒテの說に從へば萬物は我の働きて作るものに御座候。人間の心卽ち小我は有限のものに候間其働きにも區域あり。此區

域が則ち萬物となりて我に現はるゝものなり。此小我は萬物の本源なる大我より出づと申し候。此我に代ふるに心の字を以てする時はバークレーの所說と更に何等の異なる所なきやうに覺え候。されば是亦唯心論と申すべきものに候。原來唯心論と凡神論は物の見方の相違にして議論の相違には非ず。萬物の發展し來る本源より目をつけ候へば凡神論となり、我心の存在より萬物の存在を論ずるときは唯心論となり申候。されば〜ーゲルも萬物の本體は知るべからず、唯實在として疑ふべからざるものは我(卽ち心)なり、宇宙は我の發現に異ならずと說くに於ては唯心論者と目すべきものに御座候。シエリングなども同樣に御座候。

此外唯物論など申も有之候。唯物論と申すは天地の間に心靈など申す物なし、其在るものは唯だ物質のみと申す議論と聞え候へども我等の學びたる所に依れば左樣に極端なる議論は世の中に存在せざる樣に存候。之を要するに萬物の大源に就きては西洋とて別段我等が驚くほどの議論もなき樣に存候。畢竟老、莊、禪並に宋儒、明儒などの說と其實質に於ては大差なきものと存候。

(四)

問　宋儒は萬物の本源を太極と立て太極は卽ち無極なりなど申し候へども、日本の仁齋徂徠などは左樣の事は唯だ學者の考と申す迄にて取るに足らぬ空論なりと申し候。西洋にて天地の大源など說き候も畢竟空論には無之哉、御意見御漏し可被下候。

答　御尤の御申條に御座候。我等も左樣に存ずるものに御座候。有神論。凡神論。唯心論など色々むづかしく申候得共畢竟唯理窟と申ものに御座候。理窟は荻生徂徠の申され候通唯だ言ひ次第のものに

御座候。されば近世にも左樣の理窟はどうでもなること故詮議の必要もなし、それよりはとても知れぬ宇宙の大源など申す空論は差置き、人間の手に合ひ候實學を勵み候方宜敷と申す議論をするものを生じ候。佛蘭西のオーガスト、コムトなど云ふ人の說は卽ち其一例に御座候。同人の說に人間の智慧は三段の進步を經て今日に至れり。第一期は神學の時期にて人間の心に萬物の本體、起源、目的を知らんことを求むるものに候。此要求は自ら萬物の進行を見ること人の行爲の如くする傾向を生じ萬物の背後に大なる人間の如きものありと信じ、諸神を拜し、諸神轉じて一神說となり、萬物は神より起ると信ずるに至るものなり。さりながら人間は此處にて進步を止め候ものにあらず、進んで第二期卽ち形而上學の時期に入り申候。此時期には人心は既に宇宙の開展は人間の如き有神の神より起ると云ふことを信ぜず萬物は形而上の力より起る。此形而上の力が萬物の實體にして萬物は是より生ずと信ず。形而上の力とは支那にて太極と云ひ、スピノザが神といひ、ヘーゲルが實體と云ひしが如きものにて、つまりは知るべからざる萬物の本源に命じたる名に過ぎず候。さりながら形而上學も終に人間を滿足せしむるものに非ず、此時期も亦何時しか亡びて第三期卽ち實學(卽ち科學)の時代に入り申候。實學の時代には萬物の源因は尋ねても分る筈のものに非ずと斷念し、如何にして萬物は生ずるや、何故に萬物は起り來りたるやと云ふが如き問題は到底人智の及ぶべからざる閑問題なりとし。それよりは萬物の間に行はるゝ法則を學ぶに如かずとし、始めて空想を避けて實世界の研究に入り申候。此時期に至りて人間の智慧は漸く捉まへ所のあるものと相成候。第一期、第二期までは到底人間の解し得べからざることを强て解せんと勉めた

るもの故、其得たる智慧はつまり實は捉まへ所の無き空しきもの卽ち否定的のものに候ひしが實學の時期に入りて知識は始めて肯定的のものに相成候。心理學なども今は生物學の一部として科學的に研究すべきものに候。哲學と申すは諸科學の關係を統轄して總論するものなりと申すがコムト哲學の大要に御座候。コムトの流を斟み候テイン(佛國)なども萬物の原因は知るべからず。萬物は何故に存在するかは解すべからず、形而上學は存在の價あるものに非ず、存在の價あるものは唯科學のみなりと申候。智慧の上より申候へば我等も此議論に同感に御座候。何時までかゝりても知れぬものは知れぬことに御座候。伊藤仁齋の申し候如く天地開闢の前に生れたる人もなければ天地開闢は斯々の次第、宇宙萬象は斯々の源因より起り來りたりなど申すも畢竟取とめたる處なき空談に過きず候間、宇宙の原因は知るべからず、知るべきものは唯萬有の法則のみ、知ることのならぬものに骨を折りて想像說を逞くするは愚なり、それよりは知り得べき萬有の法則を研究すべしと申すこと我等に於ては異議なき儀に御座候。所詮は西洋とて別段名論卓說ある譯にも無之、西洋哲學とて孟、荀、老、莊、乃至梵學、佛學の範圍外に出づるものは無き樣に存候。且同じ西洋にても近世の哲學と申せばとて趣意は希臘哲學も同じものにて唯說明の仕方の稍同じからぬのみに候。

（五）

問　天地の大源、萬物の本體なと申すことは畢竟分らぬものと存候。然るに西洋にても神を拜し宗門の沙汰も有之候由、先は迷と申すものに無之候哉。御分別承度候事。

答　前段貴答に及び候通天地の大源、萬物の本體など申すは所詮明ら

めのつくべき筋に無之候。さりながら曩にも申上候通、人間はそれが分らぬと申して濟まし居られぬものに候。智慧に於ては左樣の事は分り申さず候へども生命はそれが分らぬにては濟まされぬものに候間、何とか說を作り申候。有神論。凡神論。唯心論など申すものも畢竟、此生命が生み出したるものに御座候。此智慧と生命の差別は善く善く御勘考被成候へかしと存候。シユライエルマエル(獨逸)と申すは獨逸にては近世神學の泰斗に御座候。此人は宗門の眞理は證據にて說明すべきものに非ず、證據論を超絕したるものにて、其基礎は我靈魂中の光なりと申され候、其論旨を約すれば神ありと申す證據は無し、智慧の上よりは神のあることは知り難きことなれども、我靈魂の內に光あり、此光に照せば神あることは明なり、されば宗門の眞理は證據論よりは入り難きものなりと申すにて候。エメルソンも亦人は自分の智慧よりも賢きことをするものなり、人の中心には智慧よりも賢きものありと申し候。說く所異なれども我等より見れば是れ生命の智慧より大なるものにして智慧は生命に支配せらるべきものたることを申したるものに外ならずと可申候。仔細は宗門は成程智慧の上より申候へば智慧の敎ふる所はほんの些細の事にて、それには生命を託し難く候。萬有解すべからず、天地知るべからずと申すことにて人間中心の要求(卽ち生命)が滿足致し可申哉。その成らぬことは知れたることに御座候。されば科學は如何ほど進み候とも、それだけにては人心は光明を失ひ、希望を奪はれ、煩悶して次第に生氣を枯らし申すべく候。一人既に此の如くなれば一國一社會も亦此の如くなるべく候。されば ォーガストコムトはたとひ現代は科學の世なりと誇り候とも、科學の世にも中

心の憂悶はなきに非ず候。是れしかしながら智慧を主とし生命を從とするより起りたる過に候。若し人間は生命の爲めに存在するものなり、知りたることの爲めに活きて居るに非ず、活きて居るが爲めに知ることを求むるなりとて智慧と生命の位置を顚倒し、生命を主とし、智慧を從として考へ候はんにはたとへば宗門の沙汰は智慧より申候へば迷なりと申すべけれども生命より申候へば人間に缺くべからざるものに候へば、何れの時代に於ても已むに已まれぬものと存候。是に於て乎、有神論も已むべからざることに相成候。

（六）

問　宗教の必要竝に耶蘇の事、大概承り度候。

答　前文申上候(一)如く宗門は智慧より申候へば迷に相違なく候得へども生命より申候へば一日も缺くべからざるものに御座候。而して生命は智慧よりも大切のものに御座候間、宗門の沙汰はたとへば智慧より云へば排斥すべきものなりとも人間に取りては去り難きものに御座候。斯く申候はんには然らば宗門は生命を支ふる方便に過ぎざるやとの御論も起り可申候。我等は左樣申而差支なき儀と存候。但し方便と申せば、たとへば此の方便が惡るければ彼の方便を用ふると申す樣に挿換のなるものとも取られ候へども宗教が生命を支ふる方便なりと云ふは、猶ほ食物が生命を支ふる方便なりと申すが如く挿換のならぬものを申にて候。命は食に在りと申候。食なければ命は直ちに絶え候のみならず、生命存續の要求は常に食物を求むるものに御座候。それと同じく生命は又宇宙萬有の解釋を求むるものに御座候。之を求めて何ものをか獲、始めて滿足するものにて、何ものをも獲ずと感じ候間は煩悶を重ね、遂に自ら此世に生存する價値なしとするに至

り、從て疲勞も生じ、從て意氣の消沈を來たし、從て全く滅亡するに至るべきものに候。されば宗門の敎は生命を支ふるに缺くべからざる方便と申すべく候。或は斯樣申候はゞ世の中には宗門に依らず安心致候ものもありと申さるべし。さりながらそれは乍憚自語相違と申すものに御座候。宗門とは安心の對象に外ならず候。此心全く安んじ煩悶することなく、寂寞を感ずることなく、中心の憂なく候はゞ是則ち其人既に自己の宗門を得たるものに御座候。此外別に宗門あるべき筈なく候。

◎

耶蘇敎も智慧より申せば一個の迷に相違なく候。耶蘇敎家は聖書を楯に取り、聖書は神の聖人に命じて書かせ玉ひしものなれば其記事に過あるべき筈なしとて長き間聖書無謬說を守り居り候ひしかども、人智の進むに連れてかゝる聖書論は全く破壞され畢り候。聖書の中にてもモーセの五經は新約書の如く人間に來世あることを記さず、思想信仰全然新約と同じからざるものにして且モーセの著す所に非ず。總じて舊約聖書の思想は埃及カルデアの思想を假り來りしもの多く、今の舊約書と云ふもの多くはエズラ輩の手に成りしものなり、ダニエル書はマカベス時代の作にして正史に非ずなど云ふことは第十七世紀、第十八世紀の頃より既に人々の說く所に候ひしが、近世獨逸に於て史學の進むと共に聖書の研究は一層の進步を來たし、所謂高等批評派の祖バウル出でゝ新約聖書に精嚴なる批評の加へ聖書にはバウル派の記者の手に成りし書物もあり、ペテロ派の書物もあり、いづれも當時基督信者中に在りし各黨派を代表し、若くは各黨派の議論を調和する傾向ありて、而も大抵は使徒以後の著作なりと唱へ候以來聖書批評の